

# 『寛永行幸記』 絵巻について

## — 4 種類の古活字版とその覆刻整版と写本 —

間島由美子

はじめに

### 第1章 刊本『寛永行幸記』絵巻

#### 第1節 古活字版の種別と刊本『寛永行幸記』絵巻

I、従来の種別

II、本稿における古活字版の種別と整版本

#### 第2節 古活字版『寛永行幸記』絵巻

I、第一種本

- (1) 所蔵調査
- (2) 装訂と書誌
- (3) 本文構成と詞書
- (4) 活字組版
- (5) 部分的異植字版

II、第二種イ本

- (1) 所蔵調査
- (2) 装訂と書誌
- (3) 本文構成と詞書
- (4) 活字組版

III、第二種ロ本

- (1) 所蔵調査
- (2) 装訂と書誌
- (3) 本文構成と詞書
- (4) 活字組版

IV、別種本

- (1) 栗田文庫本
- (2) 装訂と書誌
- (3) 本文構成と詞書
- (4) 活字組版

V、古活字版4種の比較と刊行過程

(1) 古活字版4種の比較

(2) 古活字版4種の刊行過程

#### 第3節 整版『寛永行幸記』絵巻

I、所蔵調査

II、装訂と書誌

- (1) 総紙数と巻表示および丁付
- (2) 印刷書名と表紙および本文料紙
- (3) 序文および摺刷状態
- (4) 彩色

III、本文構成と詞書

IV、整版と古活字版第二種ロ本との相違点

V、整版の刊行時期

### 第2章 『寛永行幸記』絵巻の著者を探る

#### 第1節 写本『寛永行幸記』絵巻から探る

I、雛屋立圃旧蔵本

II、佐々木本の真偽

#### 第2節 崇伝著『寛永行幸記』から探る

I、崇伝著『寛永行幸記』

II、古活字版『寛永行幸記』絵巻と烏丸光広

- (1) 徳川頼宣の歌
- (2) 『聚楽第行幸記』
- (3) 烏丸光賢

おわりに

## はじめに

寛永3（1626）年秋9月、上洛した大御所徳川秀忠と將軍家光は後水尾天皇を二条城に仰いだ。行幸の日程は5日間。行幸奉迎の9月6日には御所から二条城まで堀川通りを華麗なパレードが繰り広げられた。7日舞楽、8日歌の会、騎馬、蹴鞠、9日能楽、10日還行。豪華な饗膳と共に幕府から朝廷には多大な進物品も献上された。行幸の目的は当時朝廷と幕府との間にあった政治的軋轢を修復するためであった。

この寛永3年の行幸を絵巻物にしたものがいわゆる『寛永行幸記』絵巻である。上・中・下3巻の卷子本である。上巻には中宮和子をはじめとする殿上人の行列、下巻には京都所司代板倉周防守重宗を先頭に幕府の役人、將軍、大名、天皇の乗る御鳳輦などの行列が描かれる。中巻には絵が無く、饗宴の次第が記録されている。成立年代は寛永4（1627）年頃と見られている。著者は烏丸光広（1579-1638）とされているが確証はない。この絵巻には古活字版、古活字版覆刻整版、写本の3形式がある。

古活字版『寛永行幸記』絵巻は、同一紙面において文字とともに絵も一緒に植版されていることで知られている。これと似た技法を用いている挿絵本として元和・寛永頃の古活字版十二行本『曾我物語』<sup>1</sup>がある。わが国の古活字版の中には文字とともに絵や図をわずか部分的に植版した書物もいくつかある<sup>2</sup>が、この『寛永行幸記』絵巻や『曾我物語』のように多数の絵活字を用いたものは他に無く、日本の出版史において非常に注目的となっている資料である。しかし、古活字版『寛永行幸記』絵巻にはまず書名が印刷されておらず、制作過程や印刷技法等についても未だ明確にはされていない。今回調査した限りでは版式や活字に異同のある4種類の古活字版がある。またそのうちの1種類をそのままに覆刻し、『御行幸次第』と刷題簽の付された整版がある。現存するこの覆刻整版の大部分には筆彩が施されており、いわゆる丹緑本など筆彩色の刊本を研究する上で貴重な資料となっている。

写本の形式で残るものには、明らかに刊本を模写したものや似通ったもの、刊本との関連が無いもの、との二つに分かれる。前者の中には稿本の存在する可能性もあり、この絵巻の刊行過程を研究する上で重要な資料である。後者は絵巻の刊行と直接的には関係が無いものの、装訂が軸装ではなく屏風絵となっているものもあり、寛永3年の行幸記録としてばかりではなく絵師や書風の側面において、江戸初期から中期にかけて盛んに制作された絵巻物資料としても

貴重である。

『寛永行幸記』絵巻は江戸時代を通じて大変好まれた題材であったと思われる。今日でも多くの種類が現存しているので、書誌学的に多方面から研究することができる。とりわけ古活字版は、巻物を広げるにつれ前に出現した人物や牛車<sup>4</sup>が、またすぐ後に出現し、次々と場面が展開されていく活面の面白さを持ち、画像としても充分楽しめる資料である。

当館では現在、古活字版2種類3点（本稿ではそれぞれ国会A、B、C本と称す）、覆刻整版1点（国会D本と称す）、江戸前期の俳人雛屋立圃の旧蔵本であった彩色写本1点の合計5点を所蔵する。本稿ではこれらの当館本の紹介を兼ねて、古活字版とその覆刻整版について他館所蔵本と比較した調査結果をまとめた。併せてこの調査結果を踏まえ、版種や刊行経緯、および著者とされている烏丸光広とこの絵巻との関連について、若干の考察を試みた。

## 第1章 刊本『寛永行幸記』絵巻

### 第1節 古活字版の種類と刊本『寛永行幸記』絵巻

#### I、従来の種別

昭和4年、当時京都帝国大学附属図書館司書官であった山鹿誠之助（1885-1956）氏が「活字本寛永行幸記について」と題する論文を『書物の趣味』第4冊<sup>3</sup>に掲載、初めて古活字版『寛永行幸記』絵巻について、活字や版式を異にする「甲」「乙」二種類の版が存在することを論じた。甲としたものは京都帝国大学所蔵<sup>4</sup>の2本である。現在の京都大学文学部古文書室所蔵本（本稿では京大古文書室本と称す）および京都大学附属図書館本<sup>5</sup>（本稿では京大図書館A本と称す）である。そのうち論文の解説に用いられたものは古文書室所蔵本の方である。乙とされたものは京都細川開益堂の所蔵本<sup>6</sup>であるが、この本はその後所在が不明である。

昭和12年、この甲乙2種類の古活字版は、川瀬一馬（1906-1999）氏が『古活字版之研究』において、乙を「第一種本」、甲を「第二種本」と改称した。そして第一種本には正宗文庫本<sup>7</sup>を新たに追加し、第二種本についてはさらに2種類の異植字版に区分して「第二種イ本」および「第二種ロ本」とした。前者には安田文庫本の1本（本稿では安田文庫A本と称す）を、後者にはもう1本の安田文庫本（本稿では安田文庫B本と称す）を相当させた。この2本の安田文

庫本<sup>9</sup>は戦災で焼失したと思われる。

次いで昭和15年、広島文理大学教授であった栗田元次（1890-1955）氏が『栗田文庫善本書目』<sup>9</sup>において自身の所蔵本を「第一種本と第二種イ本との中間に位する如く、他に伝本知られず。」として紹介した。これを受け再び川瀬氏は、昭和42年版『増補古活字版之研究』において第一種本に陽明文庫本を、第二種口本には天理図書館本<sup>10</sup>（本稿では天理A本と称する）を追加するとともに、前述の栗田文庫本を「別種本」として分類した。

ここまでの分類を川瀬氏の分類に基づき整理すると以下のとおりである。ただし、京大図書館A本<sup>11</sup>については川瀬氏は覆刻整版としているが、これは誤認なので、この表では山鹿氏の論文のとおり甲種本として第二種口本に入れる。

種別	第一種本（乙種本）	第二種本（甲種本）		別種本
		イ本	口本	
所蔵館	1. 細川開益堂本 2. 正宗文庫本 3. 陽明文庫本	1. 安田文庫A本	1. 安田文庫B本 2. 京大古文書室本 3. 京大図書館A本 4. 天理A本	1. 栗田文庫本

## II、本稿における古活字版の種別と整版本

今回、従来の種別に基づき古活字版を調査した結果、これまでの分類や版式についていわれてきたことの一部に訂正が必要であることが判明した。まず、分類表において訂正する点は、『増補古活字版之研究』に第二種イ本として上巻第13紙部分の写真が掲載されている安田文庫A本は、写真で見ると栗田文庫本と同版と認められるのでこれは別種本に移す。その代わりに、第二種イ本には東京都江戸東京博物館本（本稿では江戸博本と称す）ともう1本の京都大学附属図書館本（本稿では京大図書館B本と称す）を入れる。版式については、以下の項で第一種本から順次述べていくことにする。なお、古活字版は焼失本なども含めると全版種合わせて20本以上は確認される。

また、この絵巻には古活字版を覆刻刊行した整版がある。これまで整版は古活字版と誤認されていたものが多く、その種別が明確ではなかった。ここに今回の調査で判明した追加本を含めて、本稿で行った種別<sup>12</sup>と確認できた本数を整版も合わせて表にする。

種別	古活字版				整版本
	第一種本	第二種本		別種本	
		第二種イ本	第二種ロ本		
所蔵館	1. 国会A本 2. 国会B本 3. 陽明文庫本 4. 正宗文庫本 5. 某氏所蔵本 6. チェスターピーティー本（中・下巻） 7. 細川開益堂本（所在不明） 8. 東京帝大本（焼失）	1. 江戸博本 2. 京大図書館B本	1. 国会C本 2. 天理A本 3. 京大古文書室本 4. 京大図書館A本 5. 国文研A本 6. 書陵部本 7. チェスターピーティー本（上巻） 8. バイエルン州立図書館本 9. 安田文庫B本（不明）	1. 栗田文庫本 2. 安田文庫A本（不明）	1. 国会D本 2. 東北大本 3. 早稲田本（高木文庫旧蔵本） 4. 国文研B本 5. 天理B本 6. 蓬左文庫本 7. 五季文庫本 8. 内閣文庫本 9. 成實堂文庫本 10. 大東急文庫本 11. 歴博本 12. 龍門文庫本（目録による） 13. 岩瀬文庫本（目録による） 14. 安田文庫本2本（不明）
確認現存数	6本	2本	8本	1本	13本

## 第2節 古活字版『寛永行幸記』絵巻

### I、第一種本

#### (1) 所蔵調査

確認できた第一種本は、国立国会図書館本（2本）、陽明文庫本、正宗文庫本、某氏所蔵本、アイルランドのチェスターピーティーライブラリー所蔵本（本稿ではチェスターピーティー本と称す）、東京帝国大学本（本稿では東京帝大本と称す）<sup>13</sup>および山鹿誠之助氏の論文に第一種本として掲載された京都細川開益堂本<sup>14</sup>との8本である。そのうち東京帝大本は関東大震災で焼失したため

現存せず、細川開益堂本は所在不明であるから、確認できる現存本は6本である。実見調査したものは、国立国会図書館本2本と陽明文庫本、正宗文庫本の計4本である。某氏所蔵本とチェスタービーティー本は写真で調査した。その結果、国会本は、A本は中・下巻のみで上巻が欠、B本は上巻のみで中・下巻が欠ける。正宗文庫本は全巻が揃っているが、下巻の総紙数26枚のうち12枚が欠落している。某氏所蔵本は上・下巻合わせ10枚が欠落している。チェスタービーティー本は中・下巻のみが第一種本で、上巻が第二種口本という取り合わせ本である。結局、第一種本の完全本は陽明文庫本の1本のみである。

それぞれの書誌事項は以下のとおりである。

#### ①国会A本<sup>15</sup>

2巻2軸。現存総紙数33枚。中・下巻のみ揃。上巻欠。下巻第1紙から第22紙までが第1軸。下巻第23紙から第26紙までの4枚に、中巻9枚が繋がれ第2軸。柳葉色唐草織模様絹布表紙。見返しは金紙に金箔散。金紙貼付題簽に「寛永三年御上洛行列之圖 一（二止）」と墨書がある。本文料紙は薄茶色素紙楮。全巻に金箔散斐紙で裏打補修がされている。下巻第1紙の高さは約27.7cm。下巻第3、4、6、12、13、14、20、21、24紙の右下には「三」「四」「六」「十二」「十三」「十四」「二十」「廿一」「廿四」と印刷漢数字がある。下巻第10、22紙には「十一」「廿三」とあるが、胡粉を塗りその上から「十」「廿二」と印版押捺による訂正がなされている。下巻第7紙には左側に「七」と印判による押捺がある。下巻第3紙「松平城山守」の「城山」、第4紙「かなもり雲出守」の「雲出」、「織田後丹守」の「後丹」の部分に胡粉が塗ってある。摺刷状態はほぼ良。彩色は無い。旧蔵者印記無し。明治41年受入本。『国立国会図書館蔵古活字版図録』（平成元年）に記載がある<sup>16</sup>。

#### ②国会B本<sup>17</sup>（図版1、3、5参照）

1巻1軸。現存総紙数31枚。上巻のみ揃。中・下巻欠。鼠色絹布の改装表紙。題簽も後代のものであるが、銀箔入薄茶色料紙で「寛永行幸図 全」と墨書がある。本文料紙は薄茶色素紙楮。楮紙1枚で裏打されている。上巻第1紙の高さ約26cm。改装の際料紙の上下が少し切断されたとみられる。1紙幅約44cm内外。上巻第1紙は序文（図版1）部分であるが、序文の第1行目「それひさかた…」部分の字高は22.5cm。「それひさかた乃…能ことの者なり」までの横17行組幅は約23cm内外である。上巻第2紙は、堀川通りに面した二条城入り口東門における行幸当日の警護風景を描いた絵（以下この絵は「二条城図」と称す）であるが、この絵の中央部分には2枚の板木を合わせた継ぎ目が見える。

上巻本文第2～14紙の右下に「二」～「十四」の印刷漢数字がある。摺刷状態はほぼ良。彩色は無い。旧蔵者印記無し。平成10年受入本。

### ③陽明文庫本

3巻2軸。総紙数66枚。全巻揃。上巻全31枚で第1軸、下巻全26枚に中巻全9枚が繋がれ第2軸となっている。表紙は表に紺色、裏に白色の楮紙が張り合わされ1枚となっている。表紙の一部に補修が見られるが、ほぼ原装であろうと推定される。題簽は無い。本文料紙は薄茶色素紙楮。料紙は楮紙2枚を合わせ厚葉1枚となっている。上巻第1紙の高さ29.2cm。1紙幅は約44cm内外。序文および「二条城図」は国会B本と一致する。上巻および下巻の各紙右下にある印刷漢数字は、後述する異版の部分以外は全て国会A・B本と一致する。国会A本下巻第10、22紙に見られる胡粉による訂正は無い。下巻第3紙「松平城山守」、第4紙「かなもり雲出守」の部分も訂正は無い。しかし、「織田後丹守」の部分のみは「織田丹後守」と訂正印刷されている。全巻摺刷状態はほぼ鮮明。彩色は無い。旧蔵者印記無し。

### ④正宗文庫本

3巻2軸。現存総紙数54枚。上巻30枚で第1軸、中・下巻合わせ24枚が繋がれ第2軸となっている。上巻第1紙、中巻第8、9紙、下巻第1紙から第9紙までの合計12枚が欠落している。第1軸には表紙が無い。第2軸は緑茶色の改装絹表紙が付される。題簽は無い。本文料紙は薄茶色素紙楮。料紙は楮紙2枚を合わせ厚葉1枚となっている。上巻第1紙の高さ27.2cm。1紙幅は約44cm内外。序文および「二条城図」は国会B本と一致する。上巻および下巻の各紙右下の印刷漢数字は、後述する部分以外は陽明文庫本と一致する。全巻摺刷状態はほぼ鮮明。彩色は無い。「敦夫／珍藏」「正宗文庫」の印記がある。『増補古活字版之研究』に上巻第15紙と中巻冒頭の写真が掲載されている。

### ⑤某氏所蔵本<sup>18</sup> (写真にて調査)

3巻2軸。現存総紙数56枚。上巻27枚が第1軸。下巻20枚に中巻全9枚が繋がれ第2軸。上巻第1、7、8、20紙、下巻第1～6紙までの合計10枚が欠落している。写真のため表紙の色、保存状態等は不明。第1軸表紙左肩に「第式巻之第壹巻／後水尾天皇二條城行幸之古版圖」、第2軸表紙左肩に「第式巻之第式巻／後水尾天皇二條城行幸之古版圖」と墨書題簽が貼付される。上巻第1紙の高さ、紙幅など不明。序文および「二条城図」は国会B本と一致すると思われる。上巻および下巻にある印刷漢数字も、国会A・B本と一致すると見られる。摺刷状態は不明。部分的に彩色があるように見られる。第1軸および2

軸の巻末に「岡田眞ノ之蔵書」<sup>19</sup>と印記がある。

#### ⑥チェスタービーティー本<sup>20</sup> (写真にて調査)

1軸。現存総紙数35枚。中・下巻のみ揃。下巻全26枚と中巻全9枚が1軸に収められる。表紙には雲形模様が、見返しには金銀箔散しが見られる。表紙左側に「家光公参内御行列ノ巻中下」と墨書題簽がある。料紙、大きさなど不明。下巻第3、4、6、12、20、26紙の右下には「三」「四」「六」「十二」「二十」「廿六」と印刷漢数字がある。第17、23、24紙右下には「十七」「廿三」「廿四」と墨書数字がある。下巻第3紙「松平城山守」の「城山」部分を胡粉で消し、その上から「山城」と墨書がある。第4紙「かなもり雲出守」の「雲出」の上にも墨書訂正の後がある。「織田後丹守」の「後丹」の部分は訂正無し。彩色は無い。印記は「韻」「香巖」(神田香巖<sup>21</sup>)ほか合計6顆がある。反町茂雄編『愛蘭国ダブリン チェスタービーティーライブラリー蔵 日本絵入本及絵本目録』(昭和54年 弘文荘)74頁に後述する第二種口本上巻第2紙の写真が掲載される。

このチェスタービーティー本は3巻2軸の揃い本であるが、第1軸は第二種口本、第2軸がこの第一種本という取り合わせ本である。よって、第1軸の書誌は第二種口本のところで後述する。刊行時の異なる2種類の組版が合装された時期は不明である。

## (2) 装訂と書誌

以上の調査結果から、第一種本の本来の形は以下のとおりであったと推定される。総紙数は66枚。装訂は2軸。序文1枚と「二条城図」1枚、それに公家側の行列図29枚の合計31枚を繋ぎ合わせて上巻にあたる部分を第1軸、下巻にあたる幕府側の行列図全26枚と、中巻にあたる宴会記録全9枚を合わせて第2軸とした。

表紙は陽明文庫本の紺表紙のみが原装で、披見した他の伝本は全て改装表紙であった。陽明文庫本には題簽が無いことから、印刷題簽は付されなかったと見られる。内題および尾題も無い。序題として上巻第1紙に「寛永三年九月六日ノ御行幸二条ていへ能事」とある部分、下巻第1紙冒頭に「禁中様へ將軍公御むかひにさんたいなされノ即御ほうれんの<sup>22</sup>御供の第次<sup>23</sup>」とある部分が各巻の書名代りであったとも考えられる。料紙は素紙で、楮紙2枚を合わせ厚葉1枚となっている伝本が多い。紙高は約29cm程度である。1紙幅は約44cm内外。

第一種本では上・中・下を区分した巻表示は見られない。ただし上巻に相当する部分と下巻に相当する部分の一部の料紙右下に、丁付の印刷漢数字があ



る。丁付は上巻では序文および「二条城図」の部分は除かれて、上巻第3紙に当たる本文第1紙が「一」となっている。伝本の大部分に彩色は無いが、彩色の施されたものもある。

### (3) 本文構成と詞書

古活字版4種間において、第一種本のみは版式が異なる。すなわち、第一種本の構成および詞書は、他の第二種イ本、第二種ロ本、別種本の3種とは大きく異なる。逆に、第一種本以外の3種は細部を除きほぼ一致する。

まず、第一種本には他の3種にある各巻頭の目次部分が全て無く、この部分の記述の仕方も異なる。次に異なる部分は中巻である。歌会の記録である和歌の部分を見ると、採録される歌の総数はともに62首と変わらないが、第二種イ本、第二種ロ本、別種本の3種の版には第一種本にはない歌が1首採録され、代わりに第一種本にある歌が1首欠落している。詳述すれば、第一種本以外の組版では、第一種本の第59番「すえかけて…」の歌が抜け、代わりに第28番目に第一種本に無い「石清水…」という歌とその作者名「参議宰相藤原光賢烏丸」が入る。この採録歌の変更のため、第一種本とそれ以外の版とでは、第28番以降の歌の順番が異なる。さらに第一種本以外の3種では、最後第62番の歌「千尋ある…」(第一種本では第52番にある)の作者部分に、この歌の本来の作者「公海毘沙門堂」と、採録に落とした歌の作者名「最胤梶井」との2名の作者名が連記されている。したがって、第一種本以外の組版においては、収録された歌の数が合計62首であるが、作者名は合計63名となっている。

また他の3種の版に存在する中巻第9紙以降から終わりまで、中宮、女院等への進物目録、公家衆、女中等への進物目録、および「御行幸のていしゆかた被仰付候覚」、「御献立之次第」と題される部分が、この第一種本には全て欠落している。

以下に第一種本とそれ以外の第二種イ・ロ本、別種本の3種の版(ここでは第二種ロ本を翻刻した。また、用いている活字の字形に添うよう、仮名文字もなるべく活字のとおりとした。)との詞書の主な相違点を挙げておく。

第一種本		第二種口本	
上巻第1紙	目次の詞書無し。	上巻第1紙	「御行幸乃次第目録 一御車の先へ女中方長えにて御供之事 一御公家衆前後行列之次第之事 一御車九両能次第之事」
上巻第13紙	「からす丸左中へんくろしやうそく」	上巻第12紙	「からす丸さい志やうくろしやうそく」
中巻第1紙	目次の詞書無し。	中巻第1紙	「御行幸乃次第目録 一楽之事 一御歌乃くはい能事 同座はいの事 一御馬乃事 一御能能事 一御進物の事 同御引出もの、事 一御公家衆へ被進太刀の事 一てい志ゆかたうけ給ふ品衆の事 一御こん多て乃事」
中巻第2～6紙(和歌)	和歌数62首。作者62名。	中巻第2～6紙(和歌)	和歌数62首。作者63名。
下巻第1紙	「禁中様へ 将軍公御むかひにさんたいなされ/即御ほうれんの(「さきへ」が欠落)御供の第次(誤植)」  「板倉侍従 くろしやうそく是ハ京のしょし代」	下巻第1紙	「御行幸乃次第目録 一将軍様御むかひに御参内なされ即御ほうれんのさきへ御供の事 一諸大名衆御供能事 一御公家衆御供能事 一御鳳輦能事 一関白殿御供(第二種イ本は「乃」が入る)事 「板倉侍従」
下巻第20紙	「井伊少将」	下巻第16紙	「沢山少将」
下巻第22紙	「から笠五十本」	下巻第17紙	「御内供能から笠五十本」
下巻第23紙	この詞書なし。	下巻第18紙	「さて此次に右上巻に志るし申公家志ゆみな々御ほうれん能のさきへ御ともなされ候」

#### (4) 活字組版

##### ①序文と「二条城図」

上巻第1紙序文第1行目「それひさかた…」部分の字高は22.5cm。「それひさかた乃…能ことの者なり」までの横17行組幅は約23cm内外。上巻第2紙「二条城図」の中央に板木の継ぎ目があることから、この部分は2枚の板木に彫刻され、これを合わせて1図としていると見られる。

##### ②文字活字

第一種本の文字活字は、大サイズ（横幅約1.0～1.2cm程度）の平仮名1字活字、平仮名2字連続活字（「なり」「との」など）、平仮名3字連続活字（「からす」「くる満」「これハ」など）、漢字1字活字、漢字2字連続活字（「將軍」「兵衛」など）、振仮名付漢字1字活字（「<sup>くん</sup>軍」「<sup>かみ</sup>守」など）、振仮名付漢字2字連続活字（「<sup>ち</sup>侍従」「<sup>せう</sup>少将」「<sup>さい</sup>宰相」など）、振仮名付漢字3字連続活字（「<sup>ちよ</sup>諸太夫」「<sup>ひく</sup>非蔵人」など）と、小サイズ（横幅約5～7mm程度）の平仮名連続活字（「しやうそく」「はくてう」など）との2種類が使用されている。

下巻第3紙では「松平山城守」が「松平城山守」に、下巻第22紙では「松平大和守」が「平松大和守」に、「松平右京太夫」が「平松右京太夫」になるなど、誤植が数箇所ある。誤植部分には部分的に国会A本のように胡粉が塗布してある本もある。

##### ③絵活字

絵活字の総数は96個である。この総数の絵活字を反復使用して、全巻で714個の絵を摺り出している。詳細は第二種口本のところで述べる。

#### (5) 部分的異植字版

調査した諸本の間で、文字組および絵組に相違のある紙面がある。このことから、第一種本では摺刷時にその部分のみ版が組み替えられたと考えられる。また版は組み替えずに誤植文字のみを差し替えている紙面も見られる。

明らかに版が組み替えられている紙面は、上巻本文第1、2、3、4、15紙と下巻末第26紙の合計6枚である。上巻本文第1、2、3、4、15紙（国会A本とチェスタービーティー本は上巻欠。）の5枚は、陽明文庫本と正宗文庫本とが同版である。国会B本と某氏所蔵本とは、陽明文庫本および正宗文庫本を訂正し、組み替えたと思われる異植字版である。下巻末第26紙の跋文部分（国会B本は下巻欠。）については、正宗文庫本の1本のみは組み版が異なる<sup>24</sup>。陽明文庫本、国会A本、某氏所蔵本、チェスタービーティー本の4本は同版である。

この4本は正宗文庫本を訂正し、組み替えた版である。

また誤植文字のみ差し替えている紙面は、陽明文庫本の上巻本文第15紙、21紙、下巻第4紙の合計3枚である。この部分については版は組み替えられていない。

すなわち、第一種本のなかには3種類のタイプがあることがわかる。正宗文庫本タイプは、最初の摺刷のままの全66枚を装訂したものである。陽明文庫本タイプは再摺りした4枚を差し替えて装訂したものであり、内訳は誤植文字のみの訂正をした上巻本文第15、21紙、下巻第4紙の合計3枚と、版を組み替えた下巻第26紙跋文である。国会A・B本タイプ（某氏所蔵本、チェスタービーター本もこのタイプである）は、装訂時に6枚を差し替えたものである。しかし、この6枚（上巻本文第1、2、3、4、15紙および下巻第26紙）は全て版を組み替えて再摺りしたものである。

次ページの図は、上巻部分の3タイプにおける相違点を、正宗文庫本を基準として一覧表にしたものである。

## II、第二種イ本

第二種イ本は、次に述べる第二種ロ本と版式をはじめとして、ほとんどの部分が同じである。文字活字の全ては一致しないが使用している絵活字は全て一致しており、絵活字に注目するならば、両者は完全な異植字版の関係にある。また、本文の構成も全く同一である。

確認された現存本は、江戸博本と京大図書館B本との2本である。このうち京大図書館B本は中巻の詞書部分のみであるから、全容がわかる完本は江戸博本1本のみである。

### (1) 所蔵調査

#### ①江戸博本<sup>25</sup>

3巻3軸。総紙数68枚揃。紺色地楮紙表紙は原装とみられる。しかし、表紙表面の剥落のため金泥絵などの有無は不明である。見返しは桃色地に銀箔散し。各軸の左肩に金紙の題簽が貼付される。第1軸の題簽には「行幸次第目録上」と墨書があり上巻全29枚が、第2軸の題簽には「行幸次第目録中」と墨書があり下巻全21枚が、第3軸の題簽には「行幸次第目録下」と墨書があり中巻全18枚が収められる。したがって、上・下・中巻の順序である。

外箱には「寛永行幸記 寛永三年頃刊／古活字版 三巻」と墨書がある。本

	正宗文庫本	陽明文庫本	国会B本
上巻本文 第1紙	①「きん里ちよちう かた」（「御」が抜 ける） ②「おおち一人」（誤 植「おち」の部分 を胡粉で塗る）	①「きん里ちよちう かた」（「御」が抜 ける） ②「おおち一人」と 誤植 * 正宗文庫と同版	①「きん里御ちよち うかた」 ②「おちこ一人」 * 正宗文庫と異版
上巻本文 第2紙	①「いせとの はり 満との」 ②右下に丁数「四」 と印刷	①「いせとの はり 満との」 ②丁数は料紙継目で 見えず * 正宗文庫と同版	①「いせ殿 はり満 殿」 ②右下に丁数「二」 と印刷 * 正宗文庫と異版
上巻本文 第3紙	①「新大こんとの」 と誤植（「な」を 「大」の右下に印 判で押捺訂正） ②右下に丁数「五」 と印刷	①「新大こんとの」 と誤植（「な」を 「こ」の横に印判 で押捺訂正） ②丁数不明 * 正宗文庫と同版	①「志ん大なこん殿」 ②右下に丁数「三」 と印刷 * 正宗文庫と異版
上巻本文 第4紙	①「梅小路殿…さき やう殿」 ②右下に丁数「四」 と印刷があり、文 字は陽明文庫本と 一致、さらに「四」 の上に「六」と墨 書で訂正	①「梅小路殿…さき やう殿」 ②右下に丁数「四」 と印刷があるが国 会B本とは活字が 異なる * 正宗文庫と同版	①「梅小路との…佐 きやうとの」 ②右下に丁数「四」 と印刷 * 正宗文庫と異版
上巻本文 第15紙	①「非蔵蔵人三騎」 と誤植のまま	①「非蔵蔵人三騎」と 修正印刷 * 正宗文庫と同版	①「非蔵蔵人三騎」と あるが、「三騎」の 部分は紙を貼り印 判で押捺訂正 * 正宗文庫と異版
上巻本文 第21紙	①「二きん」	①「二騎」と修正印 刷 * 正宗文庫と同版	①「二きん」 * 正宗文庫と同版

資料紙は白色素紙厚手の楮紙1枚である。上巻第1紙の高さは25.7cm。序文第1行「それひさかた乃…」の字高は23.0cm。序文「それひさかた乃……のことの者なり」までの横17行の組幅は約23cm内外。「二条城図」は2枚の板木を合わせ1図とする。上巻本文第2紙から第7紙の右あるいは左側に丁付の漢数字「二」～「七」、第8紙右に「七八」（誤植）、第9紙に「九」、第11紙から第13紙に「上十一」～「上十三」、第14紙に「十四」、第15、16紙に「上十五」「上十六」、第19紙から第25紙に「上十九」～「上二十五」と印刷がある。上巻本文第26紙左下に「上二十六」、中巻第15、16紙に「十五」「十六」と墨書がある。中巻第17紙に「十七」、下巻第2、3紙に「二」「三」、第6紙に「六」、第9紙から第17紙に「九」～「十七」と印刷がある。下巻第19紙に「十九」と墨書がある。上巻本文第3紙「肥後との」の「肥後」、下巻第11紙「安藤帯刀」の「安藤」の部分は、訂正紙を貼付した上から印判で押捺されている。

全巻にわたって漢字部分の右横には旧蔵者が付したと見られる墨書の振仮名がある。彩色は無い。各巻末に「月明荘」（反町茂雄）、「拝土蔵書」（ドナルド・ハイド）の朱印記がある。海外よりの里帰本<sup>26</sup>である。平成7年の受入記録がある。

## ②京大図書館B本<sup>27</sup>

1軸。中巻のみ。全18枚。栗色渋紙改装表紙。本文料紙は薄手の素紙楮。中巻第1紙の高さは25.5cm。1紙幅約44cm内外。全巻摺刷状態はほぼ鮮明。摺刷面は江戸博本の中巻と一致する。大正元年の受入印がある。

## (2) 装訂と書誌

第二種イ本の総紙数は68枚。軸数は3軸。構成は序文1枚と「二条城図」1枚、そして公家側の行列図27枚の合計29枚を繋ぎ合わせて上巻第1軸とし、下巻にあたる幕府側の行列図全21枚を第2軸、中巻にあたる宴会記録全18枚を第3軸としている。上・下・中巻の順序である。第一種本の3巻2軸装訂から3軸装訂に変わっている。

江戸博本の表紙は当時の装訂と見られる。上巻のみ部分的に「上」と巻表示が印刷され、中・下巻には丁付の漢数字のみが印刷されている。ただし丁付は上巻では序文および「二条城図」の部分は除かれ、上巻第3紙にあたる上巻本文第1紙を「一」としている。「上」の巻表示があることと、下巻第18紙に、第一種本には無い「さて此次に右上巻にしるし申公家しゆみな々御ほうれんのさきへ御ともなされ候」の文があることから、この版においては「上巻」の呼称

が確認される。

印刷題簽は無い。内題も尾題も無い。ただし、各巻冒頭には第一種本には見られなかった目次が印刷される。料紙は厚手素紙で楮紙。紙高は約25～26cm程度。彩色は無い。

### (3) 本文構成と詞書

第二種イ本の本文は第二種口本とほとんど一致する。ただし組み版においては、上巻本文第1紙から第7紙までと、下巻第2紙から第5紙までとが、第二種口本とは数行分ずつずれている。それ以後はほぼ一致する。第二種イ本の上巻本文第19紙「西洞寺宰相」、第20紙「西洞寺中納言」とある部分は誤植で、第二種口本では「西おん寺宰相」「西おん寺中納言」とある。下巻第15紙は、第二種口本では「左野佐京進」と誤植であるが、この種では「佐野左京進」と正しく植字されている。

### (4) 活字組版

#### ①序文と「二条城図」

序文第1行「それひさかた乃……」の字高は23.1cm。序文「それひさかた乃…のことの者なり」までの横17行の組幅は約23cm内外。序文中で、後述する第二種口本および別種本と共に「せい將軍」と誤植の部分は、「せいる將軍」と正しく植字されている。ここは第一種本に同じである。また「二条ていへの事」とある部分も第一種本と同じ文字使いである。この部分は第二種口本および別種本は「二条亭への事」と「てい」を「亭」と漢字を用いている。

「二条城図」は2枚の板木を合わせ1図としており、これは第一種本および第二種口本と同一の板木と見られる。

#### ②文字活字

第二種イ本の文字活字は、大サイズ（横幅約1.0～1.2cm程度）の平仮名1字活字、平仮名2字連続活字、平仮名3字連続活字、漢字1字活字、漢字2字連続活字と、小サイズ（横幅約5～7mm程度）の平仮名連続活字が使用されている。「里やう」「ひさ」「せい」など第一種本に使用されているものと一致する文字活字も見られる。ただし第一種本に使用されている振仮名付漢字活字は見られない。しかし、「次第」のように第二種口本に使用されているものと一致する文字活字も見られる。すなわち、この版種には第一種本と第二種口本との両方の文字活字が混じっている。

### ③絵活字

絵活字の総数は112個。使用している絵活字は全て第二種口本と一致する。絵組の配置も第二種口本とほとんど同じであるが、当然のことながら同一の組み版でないことから、白丁、布衣の人物の配置などに若干の相違が見られる。詳細は第二種口本で述べる。

## Ⅲ、第二種口本

第二種口本は第二種イ本と構成は全く同一である。文字活字の全ては一致しないが、使用している絵活字は全て一致しており、版式もほぼ同じである。すなわち、第二種口本は第二種イ本と同一の絵活字を使用して組み替えた異植字版である。

### (1) 所蔵調査

現存の確認されたものは8本であるが、『増補古活字版之研究』に第二種口本として写真が掲載される安田文庫B本<sup>28</sup>（不明）も含めれば9本は数えられる。このうち実見できたものは国内のもの6本である。当館本（本稿では国会C本と称す）の他には、天理A本、京大図書館A本、京大古文書室本、国文学研究資料館<sup>29</sup>本（本稿では国文研A本と称す）、宮内庁書陵部本（本稿では書陵部本と称す）である。国外ではアイルランドのチェスターピーティー本、ミュンヘンのバイエルン州立図書館本<sup>30</sup>である。

国会C本は上・中巻のみで下巻が欠ける。京大図書館A本は上・下巻のみで中巻が欠ける。国文研A本も上・下巻のみで中巻が欠ける。チェスターピーティー本は前述のように取り合わせ本で、上巻のみが第二種口本である。バイエルン州立図書館本は中巻が欠けているとのことである。

結局、完本は、天理A本、京大古文書室本、書陵部本の3本である。それぞれの書誌事項は以下のとおりである。

#### ①国会C本<sup>31</sup>（図版2、4、6参照）

2軸。現存総紙数47枚。上・中巻のみ。下巻欠。上巻が全29枚で第1軸、中巻が全18枚で第2軸となっている。表紙は薄茶色地で下部に第1軸は水色、第2軸は灰色の打雲模様がある。後代のものと見られる。表紙の左肩に第1軸「寛永三年／二條城行幸 上」、第2軸「寛永三／二條城行幸 下」と墨書書名がある。外箱に「寛永三年二條城行幸 木活」と墨書があり、「寛永三年二條行幸記 仮名木活 百九十一」と墨書の貼紙がある。本文料紙は白色素紙厚手楮



1枚。上巻第1紙の高さは26.3cm。1紙幅は約44cm内外。序文(図版2)第1行「それひさかた能…」部分字高は22.4cm。序文「それひさかた能…能ことの者なり」まで横17行文字組幅は約23cm内外。「二条城図」(本誌見返し「清福図録」参照)は2枚の板木を合わせて1図としている。上巻本文第1、2紙右下に「上一」、上二、第3紙右下に「上」、第4、5、6紙右下に「上四」、「上六」(誤植)、「上八」(誤植)、第8紙左中に「上」、同右下に「八」、第9、10紙右下に「上五」(誤植)、「上七」(誤植)、第11紙右下に「上」、第12紙左中に「上」、第13紙右下に「七」(誤植)、第14、15、17、19、21、24、25、27紙右下に「上」と巻表示と丁付の漢数字が印刷されている。上巻本文第6、7、8紙に「六」「七」「八」、第11、13、14紙に「十一」「十三」「十四」、第18、19、20、21紙に「十八」「十九」「二十」「二十一」、第23、24、25、26、27紙に「廿三」「二十四」「二十五」「二十六」「二十七」と印判押捺がある。上巻本文第16、17紙に「十六」「十七」、第22紙に「二十二」と墨書がある。中巻には巻表示はないが、第17紙に「十七」と印刷、第5紙に「五」と印判押捺、第4、6、7、8、10~15紙右下に「四」「六」「七」「八」「十」~「十五」の丁付の漢数字の墨書がある。全巻摺刷状態はやや不鮮明。彩色は無い。旧蔵者印記無し。昭和59年受入本。

### ②天理A本<sup>32</sup>

3巻3軸。全巻揃。総紙数68枚揃。第1軸の表紙裏に「巻一」と墨書があり上巻全29枚が、第2軸の表紙裏に「巻二」と墨書があり下巻全21枚が、第3軸の表紙裏に「巻三」と墨書があり中巻全18枚が収められている。上・下・中の順序で装訂されている。白花唐草模様縹色布表紙。題簽は無い。外箱に「寛永手写/御上洛に付二條御城江/行幸之略図」と墨書がある。本文料紙は素紙楮。上巻第1紙の高さは26.4cm。1紙幅は約44cm内外。序文の字高および横組幅、「二条城図」、上・中巻部分の巻表示および丁付の印刷漢数字は国会C本と一致する。下巻の大部分は「下」と巻表示のみが印刷されるが、第6、8紙右下には「下六」「下八」と丁付の漢数字も印刷されている。丁付の漢数字の墨書および印判の押捺も部分的に見られる。彩色は無い。旧蔵者印記無し。昭和15年の受入印あり。『天理図書館稀書目録和漢書之部I』(昭和15年)398番および同館編『古活字本目録—開館三十一周年記念展覧会—』(昭和36年)58頁に記載がある。

### ③京大古文書室本<sup>33</sup>

3巻3軸。全巻揃。総紙数68枚揃。上巻全29枚が第1軸、下巻全21枚が第2

軸、中巻全18枚が第3軸となっている。上・下・中の順序である。桃色地白色菊花模様紙表紙。見返しは金箔散斐紙。題簽は無い。本文料紙は素紙厚手楮1枚。全料紙左側から3.5cmほどの部分のみ、裏側から楮1枚が張り合わされ二重になっている。上巻第1紙の高さ26.5cm。1紙幅約44cm内外。序文の字高および横組幅、「二条城図」は国会C本と一致する。巻表示と丁付の印刷漢数字も国会C本および天理A本と一致する。部分的に漢数字の墨書や印判の押捺がある。全巻摺刷状態はやや不鮮明。彩色は無い。旧蔵者印記無し。

この本は前述の山鹿誠之助氏の論文で「甲種本」として用いられたものである。

#### ④京大図書館A本<sup>34</sup>

2軸。上・下巻のみ。総紙数50枚。上巻全29枚が第1軸、下巻全21枚が第2軸となっている。梅花唐草模様茶色布表紙。題簽は無い。本文料紙は素紙楮だが、全巻にわたり雲母引料紙で裏打が施されている。上巻第1紙の高さ約27cm。1紙幅は約44cm内外。序文の字高および横組幅、「二条城図」は国会C本と一致する。印刷巻表示および丁付の漢数字も全て国会C本および天理A本と一致する。部分的に漢数字の墨書および印判押捺がある。全巻摺刷状態はやや不鮮明。彩色が有る。第1軸の見返しに旧蔵者を示す朱印記がある。

#### ⑤国文研A本

2軸。上・下巻のみ。総紙数50枚。上巻28枚が第1軸、上巻第2紙と下巻全21枚とを合わせて第2軸となっている。上巻部分に錯簡がある。栗皮色紙表紙。題簽は無い。外箱の貼付ラベルに「古活字版／寛永行幸記／貳巻」と書かれている。本文料紙は白色素紙楮。全巻楮紙で裏打補修がされている。上巻第1紙の高さは約26cm。1紙幅は約44cm内外。序文の字高、横組幅および「二条城図」は国会C本と一致する。巻表示と丁付の漢数字の印刷も、国会C本および天理A本と一致する。部分的に漢数字の押捺あるいは墨書がある。全巻摺刷状態はやや不鮮明。彩色は無い。旧蔵者印記無し。平成10年受入本。『国文学研究資料館報』52号（平成11年3月）に記載がある。

#### ⑥書陵部本<sup>35</sup>

3巻3軸。全巻揃。総紙数68枚揃。各軸の表紙に「二條亭行幸の圖」と墨書書名があり、その右肩に「雑事」と朱書がある。書名の下に「共三巻」と朱書された貼紙がある。上巻全29枚の後に下巻第21紙<sup>36</sup>を合わせ全30枚で1軸、中巻全18枚で1軸、下巻全19枚で1軸、合計3軸。3軸の順序は表示がなく不明である。上巻部分には錯簡がある。灰色地紙表紙。見返しは白色楮紙。題簽は無

い。本文料紙は素紙楮1枚。上巻第1紙の高さは26.5cm。1紙幅は約44cm内外。序文の字高、横組幅および「二条城図」は国会C本と一致する。巻表示と丁付の漢数字の印刷も、全て国会C本および天理A本と一致する。部分的に丁付漢数字の印判押捺あるいは墨書がある。全巻摺刷状態はやや不鮮明である。彩色は無い。各巻の第1紙に「図書／寮印」および「出納」の朱印記がある。『和漢図書分類目録』（宮内庁書陵部 昭和28）1301頁に記載がある。ただし、目録書名は『後水尾天皇二條亭行幸記』とある。

この本は平田家旧蔵本である。後述する崇伝著『寛永行幸記』の大東急記念文庫本にも「出納」の印記がある。おそらくこの2本は寛永の行幸に列していた中原（平田）職忠（1580-1660）当時のものであらうと思われる。なお、書陵部には平田家旧蔵の本絵巻の江戸中期頃と見られる彩色写本<sup>37</sup>もあるので、同家には古活字版『寛永行幸記』絵巻と、その写本および崇伝著『寛永行幸記』との少なくとも3種類があったことが知られる。

#### ⑦チェスタービーティー本（写真にて調査）

1軸。上巻のみ。全29枚。表紙は唐草模様。表紙左側に墨書題簽「家光公参内御行列 寛永三年刊／古活字板 巻上」とある。序文字高および横組幅などは不明。「二条城図」は2枚の板木を合わせて1図となっている。（前述の『日本絵入本及絵本目録』に写真がある。）巻表示と丁付の漢数字の印刷は国会C本と一致する。部分的に漢数字の墨書がある。彩色は無い。この本は第一種本との取り合わせ本である。中・下巻および全体の書誌は第一種本で述べた。

## （2）装訂と書誌

以上の調査結果から、第二種口本の元の装訂は以下のとおりであったと推定される。総紙数は68枚。軸数は3軸。構成は序文1枚と「二条城図」1枚、それに公家側の行列図27枚の合計29枚を繋ぎ合わせ上巻第1軸、下巻にあたる幕府側の行列図全21枚を第2軸、中巻にあたる宴会記録全18枚を第3軸としている。したがって、上・下・中巻の順序で装訂されている。

上・下巻の本文料紙の右あるいは左側には、部分的に「上」「下」の巻表示が印刷され、中巻では巻表示の印刷は無い。すなわち、第二種口本では上巻、下巻が確定されたことになる。「上」「下」の印刷巻表示の下部、および中巻には部分的に丁付の漢数字が印刷されている。この漢数字の印刷に間違いが多いためであらう、調査した全ての本に装訂時になされたと思われる同一印判による漢数字の押捺、あるいは似た書体の墨書があった。

現存本のほとんどは改装されているが、京大古文書室本の桃色地白色菊花模様紙表紙に金箔散斐紙の見返しが付された表紙は、当時のものと見られる。しかし、この本にも題簽は無かったことから、印刷題簽は付されなかったと推定される。内題も尾題も無い。料紙は厚手の素紙で楮紙。紙高は約27cm程度。1紙幅は約44cm内外である。

この種において、上巻本文第12紙「二条左大臣」とある部分の「二」の字は、調査した諸本では、全て字形および角度や位置が微妙に異なることから、この字のみは押捺によるものであらうと思われる。ほとんどの伝本に彩色は施されていないが、京大図書館A本のみは彩色が施されている。

### (3) 本文構成と詞書

第二種口本の構成および詞書は、第二種イ本および別種本とごく一部を除き、ほとんど一致する。第二種イ本との比較は前に述べた。別種本との比較は後述する。第一種本と異なることは前述のとおりである。

### (4) 活字組版

#### ①序文と「二条城図」

序文第1行目「それひさかた乃…」の字高は22.4cm。「それひさかた能…能ことの者なり」までの横17行文字組幅は約23cm内外である。「二条城図」は2枚の板木に彫刻し、これを合わせて1図としている。すなわち第一種本および第二種イ本と同一板木である。

#### ②文字活字

第二種口本の文字活字は、大サイズの平仮名1字活字、平仮名2字連続活字、平仮名3字連続活字、漢字1字活字、漢字2字連続活字、および小サイズの平仮名連続活字である。文字活字の横幅サイズは、第一種本および第二種イ本とほぼ同サイズである。振仮名付漢字活字は、中巻第1紙に「侍従」、第10紙に「宰相」の2個の活字がそれぞれ1箇所ずつ使用されている。

第二種口本の文字活字は、従来用いられている大サイズの平仮名活字に小振りの書風の文字が多いことから、第一種本より小さい別種の文字活字を使用していると言われていた。しかし、第一種本と第二種口本とでは共通の絵活字を用いていることから、文字活字のサイズも同じでなければ組み版ができず、この両種の文字活字サイズは同じである。その証拠に第二種口本の序文「それひさかた能…能ことの者なり」までの横17行組幅は約23cmであり、第一種本と

一致する。またこの組幅は第二種イ本とも一致する。すなわち、第一種本、第二種イ本、第二種口本の3種は摺刷紙面上では姿が異なるが、文字活字は同種であり、共通のものを多く用いている。

第一種本および第二種イ・口本との3種に用いられている文字活字は、摺刷面で活字の摩滅が目立つことから、全てが新たに製造されたものではなく、大部分が過去に使用された既成の活字を使用したと思われる。しかし、過去のどの書物に用いられたものと一致するかは未だ明確でない<sup>38</sup>。

本文の文字組は国文研A本の下巻第10紙の紙面をはじめとして、いくつかの伝本に約2mmのインテルが数箇所影出していることから、行間に約2mm内外の行間材が挟まれ組版されていると推測できる。

第二種口本では、下巻第5紙の「佐野左京進」を「左野佐京進」と誤植している。この種の異植字版である第二種イ本と、覆刻の別種本では、この部分は正しく植字されている。

### ③絵活字

絵活字の総数は112個であり、全て第二種イ本と同じものである。すなわち、第二種イ本とは同一絵活字を組み替えた異植の関係となっていることから、行列の絵様は第二種イ本とはほとんど変わらない。しかし、第一種本とは共通の絵活字だがその数が異なることから、絵様はかなり異なる。第一種本の絵活字の総数は96個で、その96個の絵活字がそれぞれ反復使用されて総数714個の絵が摺り出されるが、第二種イ本および第二種口本では、総数112個の絵活字が反復使用されて総数741個の絵が摺り出されるからである。少ない数の絵活字は使用場所が限られており、ほぼ同じ場所に使用されているが、白丁、布衣、騎馬の人物などのように数が多いものは、組み方も大きく異なる。

白丁の絵活字を例に挙げれば、上巻のみで第一種本では11個の絵活字を繰り返して、89人を摺り出しているが、第二種口本では第一種本と同一の絵活字11個に、新たに増やした絵活字5個を加え合計16個の絵活字を繰り返し使用して、65人を摺り出している。その結果、第一種本と第二種本との絵組、言い換えればその行列の絵様は必然的に異なった様相となるのである。

なお、第一種本、第二種イ本、第二種口本の3種間では、同一絵活字の中における部分的な改変も見られる。この絵巻の中には牛車の図が全部で11図あり、これは3個の牛車の絵活字が反復使用されて摺り出されているが、この牛車の絵活字の屋根の紋が、第一種本、第二種イ本、第二種口本との3種間で異なっているのである。その異同を一々挙げることは複雑であるから略すが、例

えば、第一種本と第二種口本とを比較すると、両種ともに將軍、中宮、女一の宮の図に3回反復使用されているところの牛車の絵活字を見ると、同一絵活字でありながら、第一種本には全て2個の葵の紋が付されるが、第二種口本では、將軍の牛車のみが2個の葵の紋であり、中宮、女一の宮の紋は、葵の紋の一方が桐の紋に変更されている。(図版3と4参照)このような同一絵活字中の部分的な改変はどのようにしたのか、技法的な説明は今後の課題であろう。

次表は、第一種本と第二種イ・口本とに使用された絵活字の種類と個数の比較である。(絵活字の名称は本稿で便宜上仮に付けた。)

	絵活字総数	第一種本使用数	第二種本使用数	3種共通使用数
「二条城図」	2	2	2	2
吊輿	5	5	5	5
白丁	16	11	16	11
布衣	11	6	11	6
槍持	9	9	9	9
幡持	2	2	2	2
笠持	4	2	4	2
弓持	2	2	2	2
榻持、棧持	2	2	2	2
小舎人	10	10	10	10
帯刀	12	12	12	12
牛車	3	3	3	3
牛	3	3	3	3
鳳輦	1	1	1	1
楽人等	4	4	4	4
騎馬	27	21	25	19
將軍の馬	1	1	1	1
<b>合計総数</b>	<b>114</b>	<b>96</b>	<b>112</b>	<b>94</b>

第一種本および第二種イ・口本を合わせ、作製された絵活字の総数は114個である。そのうち第一種本と第二種イ・口本とに共通に使用されている絵活字の数は94個である。この数から、3種はほとんど同じ絵活字によって組み版さ

れていることがわかる。共通使用でない残り20個の絵活字のうち、第一種本には無く、第二種イ・ロ本に有るものは、白丁5個、布衣5個、笠持2個、騎馬6個の計18個である。第一種本には有るが、第二種イ・ロ本に無いものは、騎馬の絵活字2個のみである。

個々の絵活字の正確なサイズは、使用した活字そのものが現存せず不明であるが、おそらく幾通りものサイズがあったと思われる。けれども、およそ大中小の3種類程度に分類される。大サイズは、吊輿、牛車、牛、鳳輦、楽人、將軍の馬、および一部の騎馬の絵活字で、彫刻面の縦横約10cm内外、中サイズは騎馬の絵活字の大部分で彫刻面の縦約8cm内外、横約7cm内外、小サイズは白丁、布衣、槍持、笠持など単数の人物で、彫刻面の縦約6.5cm内外、横約3.0~3.5cm<sup>99</sup>内外と推測される。なお、絵活字の高さは文字活字と同一になっているはずである。

絵活字の形は、まま摺刷の具合から紙面に絵活字の彫刻面の角が影出されていることや、文字部分が絵の部分に入り込んでいる箇所がたびたび見られることから推測して、おそらく単純な直方体ではないようである。幡、槍、刀、馬上の人物などの突出した部分は鍵型や凹凸に作られ、かなり複雑な形になっていると想像される。また同じ紙面に使用されていなければ同一の絵活字と見間違ふほど、酷似する図柄の絵活字が多くあることも特徴である。

なお、この絵活字の画風は、古活字版十二行本『曾我物語』の組み合わせ挿絵と、人物の表情や衣裳の線の描き方などに似通った点が見られる。また「二条城図」が2個の大きな絵活字ともみられる2枚の板木を合わせ作製されていることや、別種本の項で後述するが、牛車の図などに絵活字どうしを合わせて一図とする技法が用いられていることなどから、両者には共通する発想があると考えられる。今後両者の関係について研究が進むと、その技法や制作過程などが解明されていくことと思われる。

#### IV、別種本

別種本は第二種ロ本をそのままに古活字版で覆刻したものである。確認できた現存本は栗田文庫本1本のみである。『増補古活字版之研究』に「第二種イ本」として写真が掲載されている安田文庫A本も別種本と見られるが戦災で焼失したと思われる。したがって以下別種本という場合は全て栗田文庫本を指す。

### (1) 栗田文庫本

3巻3軸。総紙数68枚揃。序文1枚と「二条城図」1枚、それに公家側の行列図27枚の合計29枚を繋ぎ合わせ上巻1軸、幕府側の行列図全21枚を下巻1軸、宴会記録全18枚を中巻1軸としている。3軸の順序は不明であるが、『栗田文庫善本書目』では上・下・中の順とあることから、栗田氏が記述した当時は上・下・中と判別できるなんらかの符丁があったかとも思われる。表紙は薄緑色紙薄茶色花模様で後代のものである。題簽、墨書書名等はない。本文料紙は白色素紙で楮1枚。裏打ちは無い。上巻第1紙の高さは26.3cm。序文「それひさかた…」の部分の字高は21.0cm。「それひさかた乃…能ことの者なり」まで17行横文字組幅は約21.3～21.5cm。「二条城図」は中央に板木の継ぎ目が認められず、第一種本、第二種イ・ロ本とは絵の細部がやや異なる。上巻第3紙右中央部に「上二」、第5、6、7、11、13、20、22、25紙に「上五」「上六」「上七」「上十一」「上十三」「上廿」「上廿二」「上廿五」、中巻第16紙に「十六」、下巻第4、7、8、9、11、13、15、20紙に「下四」「下七」「下八」「下九」「下十一」「下十三」「下十五」「下廿」と、巻表示と丁付漢数字の印刷が見える。下巻第21紙の跋文の後に「あい能まち通高田町」と刊行地と思われる刊記がある。全巻通じて摺刷状態は非常に鮮明である。彩色は無い。各巻第1紙に「栗田氏(陰刻) / 珍藏記(陽刻)」の印記がある。『栗田文庫善本書目』(昭和15年 中文館書店)に下巻第9紙と第20紙の写真が掲載されている。

### (2) 装訂と書誌

別種本は総紙数68枚。軸数は3軸。上巻全29枚、中巻全18枚、下巻全21枚。栗田文庫本の装訂は後代のもものとみられることから、3軸の順序や原表紙、題簽の有無などについては不明である。

全巻の構成は第二種口本と全く一致する。内題および尾題は無い。上・下巻の本文各紙面右側には巻表示と丁付の漢数字とが印刷され、中巻には漢数字のみが印刷されている。上巻の丁付は序文を「一」としており、この点は他の3種と異なる。下巻末尾に刊記がある。栗田文庫本に限っては彩色は無い。

### (3) 本文構成と詞書

別種本は第二種口本を古活字版で覆刻したものである。したがって、総紙数、本文の構成など全て第二種口本と一致する。しかし、詞書の細部には、極く僅かではあるが違いが見られる。相違部分は、第二種口本で誤植している箇所を



訂正した部分と、別種本が明らかに誤字である部分との両方がある。主な箇所を表にしておく。

また、別種本には、下巻巻末の跋文部分の最後に、第一種本および第二種イ・ロ本の3種には無かった「あい能まち通高田町」（9字縦組幅8.5cm）という刊記が植版されている。この刊記は別種本の刊行者の居住地を示していると思われる。「間之町通り高田町」は、御池通りの北側、高倉通りと東洞院通りの間で、御所からも二条城からも近接した所である。

	別種本	第二種口本
下巻第1紙	「一関白殿御供乃事」	「一関白殿御供事」
下巻第5紙	「佐野左京進」	「左野佐京進」
下巻第13紙	「諸太夫」 「山中備前」	「太夫諸」 「山中備前」
下巻第16紙	作美中将	美作中将
下巻第21紙	跋文「…数ならず乃ときの…行幸のてい…たくいなふこそ…」 「あい能まち通高田町」	跋文「…数ならずすときの…御行幸のてい…たくい乃ふこそ…」 (刊記なし)

#### (4) 活字組版

##### ①序文と「二条城図」

序文「それひさかた…」の部分の字高および17行横文字組幅は前述のとおりで、他の3種と比較するとかなり字間がつまっております。印刷も非常に鮮明である。この点から、他の3種は文字組は異なるものの使用文字活字のサイズは同じであったが、別種本のみはこれらとは異なるサイズの別の文字活字を使用していると推定できる。

「二条城図」は他の3種に見られる紙面中央の板木の継ぎ目はなく、1枚の板木に彫刻されている。霞の線や人物の表情なども異なる。すなわち、他の3種のように2枚合わせではなく、明らかに新しく覆刻した別の板木と認められる。なお、この板木は後述する整版のものとは別である。

##### ②文字活字

別種本の序文、跋文などの詞書部分は、他の3種と比較して組版サイズが縦横ともやや小さく、摺刷紙面も鮮明であることから、他の3種のように既成の活字を代用せず、大方、新造の文字活字を使用したと思われる。別種本の上巻

第15、16紙、下巻第16紙の3箇所には「侍従」の振仮名付漢字活字が使用されているが、これも紙面上では字形が非常によく似ているが、第一種本、あるいは第二種口本に使用されたものとは別に新しく作り直した活字であろう。

### ③絵活字

従来、別種本は、第一種本および第二種イ・口本の3種と同じ絵活字を使用していると見られていた。しかし、別種本はこの3種に使用された絵活字は使用せず、新たに第二種口本を原本として全ての絵活字を覆刻製作し、組み版印刷されたものである。摺刷面も他の3種とは格段に鮮明である。

別種本は第二種口本の覆刻であるから、第二種口本とは構成および絵組が全て一致しており、一見第二種口本と非常によく似ている<sup>40</sup>。また、個々の絵活字の配置も小部分の異なりを<sup>41</sup>除けば、第二種口本と相似である。絵活字の図様も非常によく似せて彫刻されている。例えば牛車の屋根に付された紋は第一種本と第二種イ・口本の3種間では異なるのだが、別種本と第二種口本とでは覆刻関係にあることから全く同じ紋である。しかし、人物の顔の表情、衣裳の線などは微妙に異なっている。絵活字は全部別のものであるから、第二種口本と一個一個は似ているものの細部が異なる。その最も顕著な例は、後を向き、左手に扇を掲げている布衣の人物の絵活字である。これは第一種本には無く、第二種イ・口本にのみ使用されているが、この絵活字の人物のつま先に注目すると、第二種イ・口本に使用されているものには、右足のみが描かれるが（**図版4の下部右端の人物**）、別種本に使用されているそれには、両足のつま先が描かれているのである。

さらに、用いている絵活字の総数も異なる。古活字版『寛永行幸記』絵巻には全部で11の牛車の図が摺り出されている。この部分は、第一種本および第二種イ・口本では、3個の牛車の絵活字と、3個の牛の絵活字との計6個の絵活字を繰り返し組み合わせている<sup>42</sup>。しかし別種本では、この部分は3個の牛車の絵活字と、1個の牛の絵活字との計4個の絵活字で済ませている。このことによって、絵活字の総数が変わったのである。それは以下の理由である。

まず第一種本および第二種イ・口本において使用される牛車の絵活字は、1頭の斑牛と車を描いたもの（牛車Aとする）、半分の黒牛と車を描いたもの（牛車Bとする）、半分の斑牛と車を描いたもの（牛車Cとする）の3個である。牛の絵活字は、1頭の黒牛を描いたもの（牛Aとする）、半分の黒牛を描いたもの（牛Bとする）、半分の斑牛を描いたもの（牛Cとする）の3個である。

牛車の図全て11図の中の将軍、中宮、女一の宮の牛車の3図を摺り出す時は、

牛車Aと牛Aを使用している。そして将軍と中宮の牛車の図は、牛2頭引きになっており、牛車Aと牛Aの絵活字が組み合わせられている（紙面上でも絵活字の繋ぎ目が確認される。図版3および4参照）。ところが、女一の宮の牛車は牛1頭引きとするために、牛車Aのみとなっている。したがって、牛車Aと牛Aは組み合わせたり、切り離したりする必要がある。一方、他の8図の牛車の図は、牛車Bと牛Bとを組み合わせ黒牛1頭引きとした図が4図、牛車Cと牛Cとを組み合わせ斑牛1頭引きとした図が4図である。しかし、この組み合わせからわかるように、牛車と牛の絵活字は常に同じ組み合わせなのである。そうであれば、わざわざ半分ずつの黒牛と斑牛の絵活字を作製することは無意味であり、この部分の絵活字は最初から1頭ずつの黒牛と斑牛として作ればよいのである。そこで別種本では、牛車Aと牛Aは組み合わせと切り離しに必要であるからそのまま2個の絵活字として覆刻したが、牛車Bと牛B、牛車Cと牛Cとの4個の絵活字は組み合わせる意味がないことから、それぞれ2個ずつを繋げ、新たな2個の絵活字として誕生させた。その結果、別種本においては3個の牛車の絵活字と1個の牛の絵活字との計4個の絵活字となった。よって、別種本は第二種口本の絵活字を真似て全ての絵活字を覆刻しているが、絵活字の総数は第二種口本より2個少ない110個である。

## V、古活字版4種の比較と刊行過程

### (1) 古活字版4種の比較

これまで述べた4種の古活字版についてまとめると次のとおりである。古活字版『寛永行幸記』絵巻には、全版種に書名および著者名は印刷されていない。刊年も記されない。ただし、別種本のみ「あい能まち通高田町」と刊行地が印刷されている。装訂は、第一種本が2軸で、それ以外の版は3軸である。巻表示は、第一種本には無く、第二種イ本には「上」巻のみが表示される。第二種口本および別種本には「上」「下」巻の表示がある。しかし、全版種において中巻には巻表示が無い。したがって、この絵巻は上・中・下巻の3巻とされているものの、後の整版では上・中・下巻3巻3軸が明確であるが、古活字版では全ての装訂順序が上・下・中となっているところから、中巻が独立してあったかどうかは不明である。少なくとも第一種本に関しては2軸仕立てであることから、中巻は下巻の一部とみなされていたと考えられる。総紙数は第一種本は66枚で、上巻部分は31枚、中巻部分は9枚、下巻部分は26枚である。他の3種は総紙数68枚で、上巻29枚、中巻18枚、下巻21枚である。

序文の横組幅は第一種本、第二種イ・ロ本の3種はほぼ同じであるが、別種本のみは1.5~2.0cmほど小さい。「二条城図」は第一種本、第二種イ・ロ本は同じ板木であるが、別種本のみは別の板木である。

本文全体の構成および詞書は、第一種本のみが異なり、それ以外の3種は一致する。第一種本には各巻頭の目次が未だ無く、中巻の後半かなりの部分の詞書が欠落している。

文字活字は第一種本、第二種イ本、第二種ロ本には摩滅の目立つ活字が多く見られることから、既成の活字を多用していると推測できる。別種本には摩滅した活字がほとんどみられないことから、新造の活字を使用したと思われる。

使用している絵活字の総数は、第一種本は96個、第二種イ・ロ本は112個である。この3種は同じ絵活字を用いている。別種本は第二種ロ本を元に覆刻した絵活字で、総数は110個である。絵組の様子は第一種本のみが全く異なる。第二種イ本と第二種ロ本は、絵活字数が一致することからかなりよく似ている。第二種ロ本と別種本も、後者は前者を覆刻しているのでよく似ている。絵活字の摩滅は第二種ロ本が最も目立つ。別種本の絵活字は全く摩滅しておらず鮮明である。第一種本と第二種イ本とは、第二種ロ本ほどの摩滅は見られないが、別種本ほど鮮明ではない。

古活字版4種間においては、第二種ロ本が異植字版第二種イ本を持つことや、別種本の原本であることから、書誌的に最も要となる版種である。そこで4種間の比較を第二種ロ本を中心として表にしておく。(表は次頁参照)

## (2) 古活字版4種の刊行過程

第一種本、第二種イ・ロ本との絵活字の摩滅度を比較すると、第二種ロ本は顔の線などに摩滅が目立ち、紙面上で最も鮮明さに欠ける。したがって、この3種間では第二種ロ本が最後の刊行である。第一種本と第二種イ本とは、摺刷面における絵活字の鮮明度にあまり差違は感じられない。しかし、第二種ロ本との関係上、第二種イ本の方が後の刊行である。別種本は第二種ロ本の覆刻絵活字であるから、第二種ロ本より後の刊行である。

以上のことから、第一種本→第二種イ本→第二種ロ本→別種本、という刊行順序が想定される。しかし、ここで第一種本を最初の刊行とするには問題が残らないではない。何故なら、絵活字の摩滅度だけに注目するならば、第二種ロ本から覆刻作製した別種本に比較して、第一種本は鮮明度が劣るのである。絵活字を新しく作製したという点では第一種本も別種本も変わらないはずである

	第一種本	第二種イ本	第二種ロ本	別種本
軸数	2軸	3軸	3軸	3軸
順序	上巻第1軸、下・中巻第2軸	第二種ロ本に同	上巻第1軸、下巻第2軸、中巻第3軸	第二種ロ本に同
総紙数	66枚（上巻31枚、中巻9枚、下巻26枚）	第二種ロ本に同	68枚（上巻29枚、中巻18枚、下巻21枚）	第二種ロ本に同
書名	無し	無し	無し	無し
刊記	無し	無し	無し	「あい能まち通高田町」とある
巻表示	無し	上巻のみあり	上・下巻にあり	上・下巻にあり
丁付	上・下巻に丁付漢数字あり 丁付は上巻第3紙から始まる	全巻に丁付漢数字あり 丁付は上巻第3紙から始まる	全巻に丁付漢数字あり 丁付は上巻第3紙から始まる	全巻に丁付漢数字あり 丁付は上巻第1紙序文から始まる
序文第1行字高	22.5cm	23.1cm	22.4cm	21.0cm
序文横組幅	23cm 内外	23cm 内外	23cm 内外	21.5cm 内外
「二条城図」	第二種ロ本に同	第二種ロ本に同	板木2枚合	板木1枚
詞書	第二種ロ本と異なる	第二種ロ本と同	第一種本と異なる	第二種イ本、別種本と同
文字活字	大活字 小活字 振仮名付漢字活字多用 既成活字多用	大活字 小活字 振仮名付漢字活字無し 既成活字多用	大活字 小活字 振仮名付漢字2個2箇所 既成活字多用	大活字 小活字 振仮名付漢字活字1個3箇所 新造活字
絵活字数	総数96個（この内94個は第二種ロ本と共通）	第二種ロ本と同	総数112個	総数110個（第二種ロ本の覆刻）
絵活字配置	第二種ロ本と全く異なる	第二種ロ本とやや異なる	第一種本と全く異なる 第二種イ本とやや異なる 別種本と似る	第二種ロ本と似る
絵活字の摩滅	ほぼ鮮明	ほぼ鮮明	やや摩滅	鮮明
彩色	1本有り	現存本には無し	1本有り	現存本には無し

から、第一種本の絵活字も非常に鮮明でなければならない。ところが調査した現存第一種本には極めて鮮明といえるものはなかった。しかし、現時点では組み版の様式からは前記以外に刊行順序は考えられないことから、この疑問はひとまず措く。

まず、第一に絵活字96個を用いて、第一種本を刊行した。第一種本では目次も付されず、内容的技術的に未だ試行錯誤の段階である。故にこの時は摺刷時における小部分の組み替えがあった。次に、第一種本に使用した94個（騎馬の2個は失われたか）の絵活字に、18個の新しい絵活字を加えて第二種イ本を刊行した。次に、同一の絵活字を用いて再度第二種口本を刊行した。ここまでの版は、文字活字に共通部分があることや、絵活字が同じであることから、版元も同じであろうと思われる。この時点で絵活字の摩滅はかなり進んでいる。そこで、新たに第二種口本を原本として、新しい絵活字を作製し、その際おそらく文字活字も新たに作製して別種本の刊行が行われた。ここに初めて「あい能まち通高田町」と刊記が入る。別種本の刊行地は、京の「あい能まち通高田町」であるが、この刊行者が前の3種を刊行したところと同一版元か否かは不明である。明らかなことは古活字版第一種本、第二種イ本、第二種口本の刊行地もまた京都であるということである。

古活字版の刊行時期は寛永3年9月以降で、後に述べる整版が刊行されるまでの期間である。寛永中期頃までであろうか。

刊行部数は伝本状況から推定すると、第一種本と第二種口本が同程度、第二種イ本には伝本が少ないことから、何かの理由で作製部数が少なかったと思われる。しかし、第一種本、第二種イ本、第二種口本の3種を合わせるならば、第二種口本では絵活字に摩滅が見られる点などから、かなりの数が摺刷されたと考えられる。別種本は確認できる伝本が2本のみであることから、これも第二種イ本と同様刊行部数は極わずかであろうと推測できる。また、別種本の絵活字を用いた異植字版が見られないことから、新しく絵活字を作製したにもかかわらず、この絵活字による組版刊行は1回のみであったと思われる。おそらく別種本が刊行された後、間もなく整版が刊行され、これに取って代わられたのではないだろうか。

それでは、古活字版『寛永行幸記』絵巻はどのような人々の手に渡ったのか。第一種本が陽明文庫にあるところをみると、まず第一種本が最初の試みであったことから、その一つを公家のトップである近衛家に贈呈したものと思われる。この時は関白近衛信尋（1599-1649）である。書陵部本の第二種口本が蔵人所

出納を勤めた平田家旧蔵本であることから、中原職忠の手元にも1本あったことがわかる。これ以外には手がかりが無いが、少なくとも何本かは公家の手元にあったのである。一方、武家側にあったか否かは明確な来歴のある伝本が見つからず不明である。

古活字版の刊行過程や刊行部数、頒布経路などに関しては、現時点では伝本の調査が充分に行き届いていないことや、将来新たな伝本が発見される可能性もあり、未だ確実なことは言えない。次に整版について述べる。

### 第3節 整版『寛永行幸記』絵巻

整版『寛永行幸記』絵巻は、古活字版の全版種と対照すると、ほとんど全てが第二種口本と重なり、他の版種とは重ならない。よって、第二種口本をもとに覆刻したものであることが判明する<sup>43</sup>。

古活字版は種別ごとの伝本は少ないものの、全種を合わせるならば確認できた現存本は17本あった。整版は古活字版に比較してかなり多く遺るように思われたが、現存の確認できたものは13本であった。最近の古書店の目録情報<sup>44</sup>等を含めてもそれほど数多いとはいえない。おそらく刊本『寛永行幸記』絵巻は、古活字版と整版とは同程度が現存していると思われる。

#### I、所蔵調査

当館本（本稿では国会D本と称す）も含め調査できたものは東北大学附属図書館本（東北大本と称す）、早稲田大学図書館本（早稲田本と称す）、国文学研究資料館本（国文研B本と称す）、天理図書館本（天理B本と称す）、蓬左文庫本、五季文庫本<sup>45</sup>、内閣文庫本、お茶の水図書館成篁堂文庫本（成篁堂文庫本と称す）、大東急記念文庫本（大東急本と称す）、国立歴史民俗博物館本（歴博本と称す）の11本である。これ以外に目録によれば龍門文庫<sup>46</sup>、岩瀬文庫<sup>47</sup>にもあるが、この2本は未披見である。また『古活字版之研究』によれば安田文庫にも2本あった由である。

整版は比較的全巻揃ったものが多く、国会D本、東北大本、早稲田本、国文研B本、天理B本、蓬左文庫本、五季文庫本、歴博本の8本が揃いである。その中で国会D本、早稲田本、国文研本、天理B本、五季文庫本、歴博本には錯簡がある。錯簡の存在しないものは、東北大本と蓬左文庫本の2本のみである。けれども、東北大本には題簽の部分的な剥落や、表紙に補修の形跡があること

から、結局、完全に原裝訂を保っている本は蓬左文庫本1本のみである。内閣文庫本では上巻第5紙が、大東急文庫本では上・中巻と下巻第1紙が、成篋堂文庫本では上巻がすべて欠落している。

それぞれの書誌事項は以下のようである。

#### ①国会D本<sup>48</sup> (図版7参照)

3巻3軸。全68枚揃。上・下巻が入り混り錯簡がある。錯簡訂正後は上巻全29枚、中巻全18枚、下巻全21枚となる。錯簡本であるが、表紙は原裝で紺紙に金銀泥で秋草模様が描かれている。見返しは雲母引料紙に金銀切箔散。表紙左肩に雲母引料紙手持枠入刷題簽(大きさ14.8×3.8cm 枠内14.1×2.9cm)が貼付され、「御行幸次第上(中)(下)」と印刷書名がある。本文料紙は厚手の楮紙で、表裏ともに雲母引が施される。上巻第1紙の高さは29.8cm。序文第1行目「それひさかた…」部分の字高は21.7cm。「二条城図」は1枚の板木に彫刻されている。上巻第7、8紙右側に長方形の枠で囲み「上ノ八」「上ノ七」と天地が逆に印刷されている。そのやや下方に同じ長方形の枠と漢数字が見えるが、料紙の継ぎ目のため判読不能。上巻第10、26、29紙右下に同様長方形の枠中に「上ノ十」「上ノ二十六」「上ノ二十九終」、中巻第11、15紙に「中ノ十一」「中ノ十五」と印刷がある。全巻摺刷状態は鮮明である。彩色が有る。色数はほぼ、朱、黄、緑、青、紺、肉、紫、白、茶の9色ほど。上巻は全巻に彩色が有るが、下巻には一部彩色されない箇所がある。旧蔵者印記無し。平成12年受入本。

#### ②東北大本<sup>49</sup>

3巻3軸。全68枚揃。上巻全29枚で第1軸、下巻全21枚で第2軸、中巻全18枚で第3軸。現状は上・下・中の順序である。表紙には後代の補修が加えられている。第1軸のみほぼ元の体裁を保ち、紺紙表紙であるが、模様等は薄れており不明である。刷題簽は第1軸上巻のみが現存し、国会D本と一致する。ただし左下部に破損がある。第2軸の題簽は剥落している。第3軸は表紙部分はほとんど剥落し、内側に補修時に補強のために入れたと見られる後代の文書の反故紙が見える。しかし、見返しは全て元の雲母引料紙で、金銀切箔散がある。本文料紙は厚手の楮紙素紙を2枚重ねせている。雲母引は見られない。上巻第1紙の高さは29.7cm。序文「それひさかた…」の部分の字高および「二条城図」は国会D本と一致する。上巻第29紙右下に長方形の枠で囲み、その中に「上ノ二十九終」と印刷がある。全巻摺刷状態は鮮明。彩色は無い。狩野亨吉旧蔵本。狩野文庫画像データベースに掲載されている<sup>50</sup>。



### ③早稲田本<sup>51</sup>

3巻3軸。全68枚揃。現状は上巻29枚と下巻の1枚とで第1軸、中巻18枚で第2軸、下巻20枚で第3軸。第1軸には下巻第21紙が1枚混入している。大幅な錯簡が見られる。錯簡訂正後は上巻全29枚、中巻全18枚、下巻全21枚となる。当初の装訂は変更されているが、表紙は原装である。黄土色の絹表紙で桐花模様織。見返しは雲母引料紙に金銀切箔散。刷題簽は国会D本と一致するが、第3軸下巻のみ現存し他は痕跡のみである。本文料紙は楮紙2枚を重合し、表裏に雲母引が施されている。上巻第1紙の高さは29.7cm。上巻第1紙序文「それひさかた…」の部分の字高および上巻第2紙「二条城図」は、国会D本と一致する。上巻第29紙右下に長方形の枠内に「上ノ二十九終」、中巻第10、11、12紙に「中ノ十」「中ノ十一」「中ノ十二」と印刷がある。下巻第10紙「成瀬準人」の「成」の文字は墨書である。第11紙「紀伊大納言」「安藤帯刀」の文字も墨書。全巻摺刷状態は鮮明。彩色が有る。色は朱、肉、黄、緑、茶、白など。印記無し。横山重旧蔵本<sup>52</sup>。早稲田大学図書館ホームページ「赤木文庫旧蔵書全目録」に掲載されている<sup>53</sup>。

この本は、今井貫一氏が「絵入本寛永行幸記の著者」と題する論文で、『寛永行幸記』絵巻の稿本とする写本と対照する際に、古活字版として（これは誤認である）用いたものである。当時は高木利太（1891-1933）氏<sup>54</sup>の所蔵であった。その後に横山重氏が購入した。

### ④国文研B本<sup>55</sup>

3巻3軸。全68枚揃。上・下巻が入り混り錯簡がある。錯簡訂正後は上巻全29枚、中巻全18枚、下巻全21枚となる。装訂は変更されているが、表紙は原装で紺紙、模様等は薄れており不明である。見返しは第2、3軸のみが雲母引料紙に金銀切箔散しで、第1軸は素紙である。刷題簽は国会D本と一致するが、雲母引は薄れており不明である。本文料紙は厚手の楮紙、表裏に雲母引が施されている。ただし下巻第9紙のみの1枚は薄い楮素紙で雲母引きも施されていない。上巻第1紙の高さは29.4cm。序文「それひさかた…」の部分の字高および「二条城図」は、国会D本と一致する。下巻第21紙に「下ノ二十一終」と印刷がある。全巻摺刷状態は鮮明。彩色が有る。色は赤、朱、黄、緑、青緑、鶯、紺青、灰、茶、紫、肉、白など。見返しに「韻」<sup>56</sup>の朱印がある。木製外箱に「寛永三年 御行幸次第 寛永中刊 丹緑筆彩 三巻」と墨書がある。「御行幸之次第書」と題された後代のメモ紙1枚が付属している。昭和54年受入本。『国文学研究資料館報』第14号（昭和55年3月）に紹介がある。

### ⑤天理B本<sup>57</sup>

3巻3軸。全68枚揃。上・下巻が入り混り錯簡がある。錯簡訂正後は第1軸上巻全29枚、第2軸中巻全18枚、第3軸下巻全21枚。装訂は変更されており卵色表紙は後代のものと見られる。題簽は無い。第1軸左肩に「東福門院様行幸圖」、第2軸左肩に「御歌會之巻」、第3軸左肩に「後水尾院様行幸圖」と墨書がある。本文料紙は厚手楮1枚で、表裏に雲母引が施されている。上巻第1紙の高さは29.8cm。序文「それひさかた…」の部分の字高および「二条城図」は、国会D本と一致する。上巻第16紙右下に長方形の枠その中に「上ノ十六」、中巻第6、12~15、17紙に「中ノ六」「中ノ十二」~「中ノ十五」「中ノ十七」、下巻第1紙に「下ノ一」、第4、8、16紙に「下ノ四」「下ノ八」「下ノ十六」と印刷がある。下巻第5紙「土屋民部少将」「三浦志摩守」の「土」「浦」の各文字は墨書である。全巻摺刷状態は鮮明。彩色が有る。外箱の表に「寛永三年丙寅九月／右大臣大御所秀忠公右大将軍家光公／御上洛有之同月七日／後水尾院様東福門院様二條／御城江行幸御行列之巻三巻」、同裏に「自寛永三年丙寅至今茲文政四年辛巳／実一百九十六年也／信濃守利直公／山城守直信公／…」と文政4年(1821)に書かれた墨書がある。昭和22年受入本。『天理図書館稀書目録和漢書の部Ⅱ』(昭和26年)に記載がある。

### ⑥蓬左文庫本<sup>58</sup>

3巻3軸。全68枚揃。第1軸は上巻全29枚、第2軸は中巻全18枚、第3軸は下巻全21枚。原装本である。表紙は黄土色絹表紙牡丹唐草模様織。見返しは金銀切箔散。刷題簽があり国会D本と一致する。本文料紙は厚手楮1枚で、表裏ともに薄く雲母引が施される。上巻第1紙の高さは32.7cm。序文「それひさかた…」の部分の字高および「二条城図」は、国会D本と一致する。摺刷状態は非常に鮮明である。彩色は無い。『名古屋市蓬左文庫国書分類目録』(昭和51年)に記載がある<sup>59</sup>。

### ⑦五季文庫本

3巻3軸。全68枚揃。上巻の刷題簽が貼付された軸に下巻全21枚と上巻第2紙の計22枚が、下巻の刷題簽が貼付された軸に上巻28枚が収められる。「二条城図」は下巻の先頭にある。錯簡はあるが、表紙および見返しは原装である。紺表紙、見返しは金銀切箔散。刷題簽は国会D本と一致する。本文料紙は厚手の楮、表裏に雲母引が施される。上巻第1紙の高さは28.5cm。序文「それひさかた…」の部分の字高および「二条城図」は、国会D本と一致する。上巻第26紙右下に長方形の枠、その中に「上ノ二十六」と印刷がある。全巻摺刷状態は

鮮明。彩色が有る。旧蔵者印記無し。

#### ⑧内閣文庫本<sup>60</sup>

3巻3軸。全67枚。上巻第5紙が1枚欠落している。上巻28枚、中巻全18枚、下巻全21枚。装訂は中巻の刷題簽が貼付された軸に下巻全21枚が収められ、下巻の刷題簽が貼付された軸に中巻全18枚が収められている。補修時に装訂が変更されたと思われる。金粉散しの後代に付された見返しの内側に元の見返しがある。ただし黄土色亀甲繫模様織絹表紙部分は原装と見られる。刷題簽は国会D本と一致する。本文の料紙は全て裏打ちがされており、裏は不明であるが、表は全紙雲母引が施されている。上巻第1紙の高さは28.5cm。序文「それひさかた…」の部分の字高および「二条城図」は、国会D本と一致する。上巻第29紙右下に長方形の枠、その中に「上ノ二十九終」、中巻第10、11、15紙に「中ノ十」「中ノ十一」「中ノ十五」、下巻第21紙に「下ノ二十一終」の印刷がある。下巻第10紙「成瀬隼人」の「成」の文字は墨書。第11紙「紀伊大納言」「安藤帯刀」の文字も墨書である。全巻摺刷状態は鮮明。彩色が有る。色は朱、黄、緑、青、茶、白など。青色と緑色はかなり剥落が目立つ。内務省旧蔵本。『内閣文庫国書分類目録下』（昭和36年）に記載がある。

#### ⑨成篁堂文庫本<sup>61</sup>

中・下巻のみ2軸。全39枚。第1軸は中巻全18枚、第2軸は下巻全21枚。下巻に錯簡がある。当初の装訂は変更されているが、表紙は原装で鶯色紙に菊花模様がある。見返しは金銀切箔散。刷題簽があり、国会D本と一致する。本文の料紙は厚手の楮で、表裏に雲母引が施される。中巻第1紙の高さは29.4cm。中巻第2、6、13紙に「中ノ二」「中ノ六」「中ノ十三」と印刷がある。全巻摺刷状態は鮮明。彩色が有る。朱、茶、黄など。徳富蘇峰旧蔵本。袋1枚が添付され、蘇峰の手跡で表に「御行幸次第式巻」、裏に「昭和二年二月廿七日文行堂」と墨書がある。『新修成篁堂文庫善本書目』（平成4年）に記載がある<sup>62</sup>。

#### ⑩大東急記念文庫本<sup>63</sup>

下巻のみ1軸。全20枚。上・中巻および下巻第1紙が欠落。朱色地絹表紙唐草模様、見返しは水色地に金箔散。題簽は無い。見返しに旧蔵者の識語があり、木軸のみ元のままで表紙は安政3年（1856）に改装を施した旨が記されている。本文料紙は素紙楮紙2枚を重合させている。雲母引は施されていない。下巻第2紙の高さは28.0cm。下巻第10紙「成瀬隼人」の「成」の文字は墨書。第11紙「紀伊大納言」「安藤帯刀」の文字も墨書である。摺刷状態は鮮明。彩色が有る。『大東急記念文庫書目』（昭和30年）に書誌記述がある<sup>64</sup>。

## ⑪ 歴博本<sup>65</sup>

3巻3軸。全68枚揃。上巻全29枚で第1軸、中巻全18枚で第2軸、下巻全21枚で第3軸である。下巻第12紙と第14紙とが錯簡。装訂は変更されているが、3軸とも紺紙表紙は原装で、金泥模様の跡も幽かに見られる。見返しは第2、3軸のみが雲母引料紙に銀の切箔散で、第1軸は素紙である。刷題簽があり、国会D本と一致する。ただし雲母引は薄れている。各軸の表に「儀六三ノ上／御行幸次第上（中）（下）古版本巻／三巻之内」と墨書がある。木製の外箱に「寛永三年二條亭御行幸次第上（中）（下）古活字版 雲母引丹緑本一軸」と墨書された紙が貼付されている。本文料紙は厚手楮紙1枚、表裏に雲母引が施されているが、剥離のため濃い部分と薄い部分とがある。上巻第1紙の高さは30.4cm。序文「それひさかた…」の部分の字高および「二条城図」は、国会D本と一致する。上巻第7、8紙の丁付け印刷は、国会D本と一致する。上巻第11、15、26紙「上ノ十一」「上ノ十五」「上ノ二十六」、中巻第11、13、14紙右や下に「中ノ十一」「中ノ十三」「中ノ十四」と印刷がある。全巻摺刷状態は鮮明。彩色が有る。色は赤、朱、黄、緑、茶、黄、肉、白など。印記無し。広橋家旧蔵本。国立歴史民俗博物館所蔵となる以前は東洋文庫所蔵本。国立歴史民俗博物館データベースに書誌が掲載されている。

## II、装訂と書誌

以上の調査をまとめると整版の装訂および書誌は以下の通りである。

### (1) 総紙数と巻表示および丁付

総紙数は68枚。巻数は上・中・下の3巻。軸数は3軸。構成は序文1枚に「二条城図」1枚、それに公家側の行列図27枚の合計29枚を繋ぎ合わせて、上巻第1軸、中巻にあたる宴会記録全18枚で第2軸、下巻にあたる幕府側の行列図全21枚で第3軸である。

本文料紙の右側に長方形の枠で囲み、その中に巻表示と丁付の漢数字が印刷されている。巻表示は、古活字版では上・下巻のみの表示であるが、整版においては上・中・下巻が明確になっている。ただし、この部分の印刷が不鮮明なことや、料紙の継ぎ目で裁断されているため、補修時に題簽と巻表示とが不一致となり、紙継ぎの順序が乱れた錯簡本が大部分であった。完全本は蓬左文庫本1本のみである。

## (2) 印刷書名と表紙および本文料紙

表紙には、紙製と布製の2タイプがある。紙表紙には、紺紙に金泥で秋草模様などが施されたもの(国会D本、歴博本)、あるいは鳶色紙に菊花模様が施されたもの(成簀堂文庫本)などがある。絹布表紙には、黄土色地に桐花模様織(早稲田本)、亀甲繫模様織(内閣文庫本)、牡丹唐草模様織(蓬左文庫本)の3通りがあった。表紙の左肩に雲母引料紙に子持杵の刷題箋(大きき14.8×3.8cm 杵内14.1×2.9cm)が貼付され、「御行幸次第上(中)(下)」と書名が印刷されている。見返しは斐紙で、雲母引が施された上に金銀切箔が散らしてある。

本文料紙は、楮紙の2枚重ね合わせが明確なもの(東北大本、早稲田本)、2枚重ね合わせか否か判別できず、厚手の1枚紙と見られるもの(国会D本、蓬左文庫本、歴博本など)とがある。調査した本の料紙の大部分は雲母引が施されているが、雲母引が見られないもの(東北大本、大東急文庫本)もある。これは当初から施されなかったようである。また国文研本は全巻雲母引き料紙の中に、1紙のみ薄手の素紙楮紙に印刷されたものが混入していた。本文料紙の縦の長さは約30cm内外である。古活字版よりやや大きい。なかでも蓬左文庫本は上巻第1紙の高さが32.7cmで最も大きかった。

## (3) 序文および摺刷状態

序文「それひさかた…」の部分の字高は21.7cm。「二条城図」は1枚の板木に彫刻されている。これは別種本も同じであるが、両者は別々の板木である。

摺刷面はどの伝本も鮮明であるが、蓬左文庫本は最も鮮明であった。明らかな後刷りと認められるものは見られない。

## (4) 彩色

調査した11本のうち9本に彩色が施されていた。東北大本、蓬左文庫本には彩色が無かった。色はいずれも褪色しており本来の色が明確ではないが、ほぼ、赤、朱、黄、緑、青緑、紺、紫、肉、白、茶、灰、青などの10色程度である。色遣いは傾向として馬の手綱などには赤が、白丁には白色が、布衣の人物には緑が塗られているものの、使用箇所と用いている色とは一定ではない。しかし、扇や馬の手綱などはほとんどが同じ筆遣いで彩色されている。また筆遣いは同一の巻の中で非常に丁寧な部分と、かなり乱雑な部分とが共存している。比較的巻の最初の方は丁寧であり、後半になるにつれ乱雑になっている。なかには一紙面の全部が彩色されぬ箇所も混じっている。

総じて諸本に相違はあるものの、全体的に見れば、筆遣いや用いている色材はみな似通っていることから、この彩色は絵巻の所有者などが後代に施したものは稀で、大部分は当初から装訂者のところなどで希望に応じて施したと思われる。

なお、調査した古活字版の中にも第一種本、第二種口本に各1本ずつ彩色が施されたものがあつたが、本数が少なく細部の検討は今後に譲りたい。本絵巻の彩色に関しては他の同時代の彩色本も含めて、さらに詳細な比較検討が必要であらう。

### Ⅲ、本文構成と詞書

整版の構成は第二種口本と全く同一である。詞書もかなり忠実に第二種口本を覆刻してある。しかし異なつた部分も数箇所ある。例えば、整版では下巻第5紙「大屋民部少将<sup>66</sup>」「三浦志摩守」の「大」「浦」の字が抜けている。この部分は天理B本のみが、「土」「浦」の字を墨書で補っている。下巻第10紙「成瀬隼人」の「成」の字、および第11紙「紀伊大納言」「諸太夫あかしやうそく」「安藤帯刀」の部分も第二種口本にはあるが、整版には印刷されていない。この部分についても内閣文庫本、早稲田本、大東急文庫本の3本は墨書で補われている。

さらに比較すると、文字部分はよく第二種口本に似せて刻してあるが、絵部分の細部においては相違が顕著である。特に、同じ人物を刻しながらその表情はかなり異なる。衣裳に付された紋様なども第二種口本に有るものが刻されず、逆に第二種口本には無い全く別の模様を刻していることもある。さらに下巻第10紙では白丁2名が抜けている。そして当然のことながら絵活字ではないため、第二種口本のように全く同一の絵が繰り返し出現することはない。

### Ⅳ、整版と古活字版第二種口本の相違点

整版は第二種口本を原本として覆刻していることから、両者は非常によく似ており見間違えられることが多い。主な相違点は以下の表のとおりである。

	第二種口本	整版
巻数・軸数	3巻3軸	同じ
総紙数	68紙	同じ
巻表示、丁付	「上」「下」巻のみ 部分的に 丁付の漢数字がある	長方形の枠で囲みその中に 「上」「中」「下」の巻表示と、 丁付の漢数字がある
表紙	桃色地白色菊花模様紙表紙など	紺地秋草模様紙表紙、黄土色 地牡丹唐草模様布表紙など
書名	無し	刷題簽「御行幸次第上(中) (下)」
序文第1行字高	22.4cm	21.7cm
二条城図	板木2枚合	板木1枚
料紙	素紙	大部分が表裏雲母引
彩色	大部分が無い	大部分が有る

## V、整版の刊行時期

整版は第二種口本を原本としており、刊行は第二種口本よりは後である。同様に第二種口本を原本としている別種本があるが、増刷可能な整版が刊行された後で古活字版が再び刊行されたとは考えられないことから、整版は別種本よりも後の刊行と推測される。よって刊本『寛永行幸記』の刊行順序は、第一種本→第二種イ本→第二種口本→別種本→整版、という経過が考えられる。整版の刊行時期は古活字版との関係や彩色の具合から、寛永の後半頃であろうか。今回調査した範囲では明らかに後摺りと認められるものや、訂正版はなかったが、整版の刊行がいつ頃まで何回ほど摺刷されたかの詳細は不明である。

刊行部数は確認できた現存本が13本であったことから、料紙を具引きや素紙などに代えて、かなりの数が刊行されたと見られる。頒布や販売範囲は古活字版同様によくわからない。幕府側では、蓬左文庫本が摺刷面が非常に鮮明であり、雲母引きの料紙や緞子表紙の装訂などの状態の良さなどから、尾張徳川家への献上本であろうと思われる。公家側では歴博本が広橋家旧蔵であることから、行幸に列した権大納言広橋総光の手沢本か否かは別として、広橋家にはあったことが知られる。なお、こちらは本文は雲母引料紙だが、表紙は布では

なく紺紙表紙である。この2例以外は不明である。

## 第2章 『寛永行幸記』 絵巻の著者を探る

この絵巻の著者は今日『国書総目録』をはじめとする多くの文献では、烏丸光広(1579-1638)としている。根拠は、昭和5年に当時中之島図書館館長今井貫一(1870-1939)氏が『書物の趣味』第6冊に書いた「絵入本寛永行幸記の著者」と題する論文<sup>67</sup>である。しかし、論文の根拠とする佐々木計次郎氏旧蔵本(以下佐々木本と称す)2巻の写本は、はたして烏丸光広の自筆草稿本であるのか、刊本の模写ではないのか、この点について未だなんらの検討もなされていない。佐々木本は目下所在が不明であることから披見できず隔靴搔痒ではあるが、これまでの刊本調査から推定できる範囲で検討してみたい。

その前提として、まずこの絵巻において写本の形式で遺るものを概観する。その後佐々木本について再考してみる。次に視点を変えて、ここにもう一本の行幸の記録である崇伝著『寛永行幸記』をとりあげる。この書と、古活字版『寛永行幸記』絵巻とを比較することにより、烏丸光広を本絵巻の著者とすることができるか否かを探る。

### 第1節 写本『寛永行幸記』絵巻から探る

手書きの『寛永行幸記』絵巻は江戸時代を通じて相当多く作製され、今日非常に数多く遺っている。しかし、これまで調査した範囲では明確に寛永頃まで遡れるものは見つからず、傾向として寛文から元禄頃の書写と見られるものが目立つ。写本の絵巻は大別して、明らかに刊本を模写したものや、似通っており何らかの形で刊本との関係を示唆するものと、刊本との接点がほとんど見られないものとの2種類に分かれる。前者の中には稿本が存在する可能性もあり看過できない。後者は『寛永行幸記』絵巻の刊行過程を考察する上で直接的には関係しないものである。

刊本に依拠しているものはその構成から、①古活字版第一種本に依拠した写本、②古活字版第二種イ本、あるいは第二種ロ本、別種本、整版のいずれかに依拠した写本、③冊子本に依拠した写本、の三とおりに分かれる。①はいまのところ例をあげえない。②はいくつかある<sup>68</sup>。当館で所蔵する雛屋立圃旧蔵の『寛永行幸記』絵巻1軸(本稿では雛屋立圃旧蔵本と称す)は、第二種ロ本を手



本として作製されたものである。そして問題の佐々木本2巻2軸(中・下巻のみ、上巻欠。)も後述する点からやはりこの種類に入るとと思われる。③に相当する写本は蓬左文庫所蔵本3巻3軸<sup>69</sup>である。同書の巻末には冊子本として最初に刊行された元禄6(1693)年版<sup>70</sup>の跋文がそのまま写されており、元禄版をもとに描かれたことが知られる。これらの数多い写本の中から、ここでは雛屋立圃旧蔵本と佐々木本についてのみ触れる。

一方、刊本との関係が薄く、刊本を直接的には参照せず描かれたとみられる写本も、本絵巻の成立を考察する上での必須の参考資料ではあるが、数の多さもあって未だ十分な調査が行えないので、本稿では触れない。

## I、雛屋立圃旧蔵本<sup>71</sup>(図版8参照)

1巻1軸。全30枚。序文2枚に「二条城図」1枚、それに本文27枚を合わせ1軸としている。題簽、内題ともに無い。小豆色絹表紙。装訂は後代のものである。第1紙の高さは32.5cm。序文部分の料紙には金銀泥で三つ葉模様の下絵が描かれる。絵は金泥、丹、黄、緑、黒等の筆彩で細密丁寧に描かれている。絵部分の天地には全て金箔が散らしてある。料紙は鳥の子。巻頭に「雛屋立圃」、巻末に「松翁」の朱印記がある。京の雛人形細工師野々口親重(1595-1669)<sup>72</sup>の旧蔵本である。書写年の記載は無いが、料紙や狩野派風の画風から17世紀中頃の書写とみられる。

この写本1巻1軸は、刊本3巻3軸の上巻(公家側の行列)に相当する部分である。構成は第二種口本と同じである。第二種口本と比較すると詞書部分の相違はほとんど無いが、序文の一部で「天气を得給ふに」とある部分のみが、「天道にかなひ給ふゆへにや」と変更されている<sup>73</sup>。人物や車の配置なども、総体的に第二種口本に添って描かれている。しかし、細部を点検すると衣裳や牛車の紋、また白丁や布衣の人物の姿などは異なっており、諸処に絵師の創意が見られる。第二種口本を参考にしてしていることは明らかであるが、模写ではない。平成13年受入本。

## II、佐々木本の真偽

烏丸光広の自筆草稿本といわれているものである。この写本の手がかりは今井論文に掲載されている刊本の中巻第1紙と、下巻第14紙と巻末に相当する部分の3枚の写真のみである。今井氏はこの写本を高木利太旧蔵本(ただし、高木本は整版で、今井氏は活字本第二種口本と誤認して論文に用いている。)と

比較した。その結果、佐々木本は全ての部分で第二種口本の中・下巻と一致し、個々の絵の細部まで全く同じであること、およびその書風は勿論のこと光広の花押までであることなどから、光広が自ら筆をとり、絵の部分のみを絵師に描かせたもので、古活字版『寛永行幸記』の草稿本であるとしている。しかし、佐々木本は写真でみる限り、整版あるいは第二種口本の模写のように見られる。絵師が描いたという絵の部分は、第二種口本の絵活字の配置そのままである。仮にこれを草稿本として、当時の職人が、完璧に原絵の通りに絵活字を彫刻することができたとしても、はたして文字活字と組み合わせつつ、草稿と一寸も違わずに絵活字を配置することができるのであろうか。組み版は草稿があっても草稿のとおりではなく、ある程度活字を植える都合があるはずである。ましてこれは多くの絵活字と文字活字とを共に植版するというわが国印刷史上初めての試みである。なるほど古活字版『寛永行幸記』絵巻においては、既に『古活字版之研究』で指摘されているとおり、すぐ前に使用された絵活字がまたすぐ後に使用されていることから、おそらく摺刷盤は1台で、前の部分で組み合わせた活字を、摺り終わり次第すぐに解体し、次の丁でまた組み替えるという非常に手間と時間のかかる仕事をしている様子である。しかし、活字と活字との空間や配置まですべて草稿本そのままに植字することは至難の技である。したがって、佐々木本は草稿本ではなく、第二種口本あるいは整版の模写と見る方が自然である。また、ここまでの調査から、古活字版の中では第一種本が最も早い刊行と見られるので、佐々木本が草稿本であるならば、第一種本と一致していなければならないのである。第二種口本と一致していることはつつまが合わない。以上の点から、佐々木本を光広の草稿本と認めることは難しい。しかし、写真からは光広の書風や花押などがよくわからないこともあり、この本に関してはさらに調査が必要である。

## 第2節 崇伝著『寛永行幸記』から探る

前節で、佐々木本をそのまま古活字版『寛永行幸記』の草稿本とみることに問題はあつたことを述べた。したがって、この絵巻には著者表示が無いのであるから著者は不明とするのが正しい。しかし、ここで草稿本とは離れて、別の角度から烏丸光広と本絵巻との関係を探ってみる。

## I、崇伝著『寛永行幸記』

寛永3年の行幸を記録したものとして、この絵巻とは別に、行幸の企画者である金地院崇伝（1569-1633）の序文が付された『寛永行幸記』がある。崇伝は行幸の直後に、その功勞により同年10月後水尾天皇から「本光国師」の称号を賜っている。崇伝の執筆目的は、序文中に「略録其一二於左以備後鑑云爾」とある如く、歴史的な大行幸である行幸の正式な記録を残すことにあった。実はこの行幸は、天正6（1588）年に秀吉が聚楽第に後陽成天皇を迎えた先例に習って行われたものである。この行幸の次第は、秀吉のお伽衆の一人である大村由己（1536-1596）が『聚楽第行幸記』<sup>74</sup>として著述している。崇伝本の著述形式は『聚楽第行幸記』を手本としている。さらに『本光国師日記』から、夢窓国師の著した『天龍行幸之記録』<sup>75</sup>を参考にしていたことも知られる。すなわち崇伝はこの2書を基にして『寛永行幸記』を著述したのである。

成立時期はやはり同日記から、行幸後それほど時を隔てぬ頃と見られる<sup>76</sup>。刊行時期も用いている活字のほとんどが既成の活字<sup>77</sup>らしいこと、加えて非常に誤字の訂正が多い<sup>78</sup>ことなどから、かなり急いで行われたと推定され、寛永3年の暮れか新年には刊行されていると思われる。おそらく行幸の企画段階からすでに刊行が計画されていたものであろう。現在、蓬左文庫に「寛永年間写。著者所献本」と目録に記載がある2巻2冊の清書本が遺されている<sup>79</sup>。

崇伝本『寛永行幸記』は漢文で書かれており挿絵はない。和歌の部分のみは整版で、他の部分は活字を用いている。序文末には「寛永三歳在丙寅菊月如意珠日」、その後「前南禅天下僧録特 賜圓照本光國師以心叟崇傳記之」（この部分一行のみは新しく製作した活字で、連続活字である。）と記されている。行幸に係わった各大名の役割分担、饗応の献立、幕府側から朝廷への贈答品のリスト、和歌の会の模様などが上・下2巻2冊にわたって細かに記録されている。

崇伝著『寛永行幸記』は10部程度が確認できる。行幸の関係者であった公家や大名クラスの旧蔵者<sup>80</sup>が目立つことや、菊花雷紋繫空押丹表紙の立派な装訂であることから、限られた範囲の人のための刊行で終わり、絵巻のように何度も刊行されることはなかったようである。国立国会図書館本は、肥後熊本藩の藩校時習館旧蔵本<sup>81</sup>である。

## II、古活字版『寛永行幸記』絵巻と烏丸光広

### (1) 徳川頼宣の歌

崇伝著『寛永行幸記』は行幸の僅かな関係者を対象としたいわば幕府の公式記録として著述したものである。一方、絵巻の方は跋文に「御きやうこうのしたい、大かた右のゑにまなふといへともこともおろかや、これはものゝ数ならず…(中略)…左様のかた々に、あらましとハなかつ申すに及はされ共、みせ申さん其為に大方ゑにもまなふなり」(第一種本の翻刻)とあるとおり、武家の世の京の都に繰り広げられた華やかな王朝絵巻を、文字ではなく絵により映し出し、遠国の人や後の世の人々にまで広く知らせることが目的であった。すなわち、崇伝と絵巻の作者では著述の目的や対象者が違っていたのである。その結果、絵巻は絵が中心であることから、文章の方も崇伝本に比較して省略部分がかかなりある。しかし、内容的には人名や数などの誤記以外は、基本的な部分に大きな相違はなく、むしろ絵巻の作者は崇伝本を参考にしている。ところが両者で全く異なる部分が1箇所ある。それは絵巻の中巻にある和歌の部分である。

二条城では9月8日の暮方より歌会が開催された。この時の和歌は崇伝本には78首収録されているが、絵巻ではそのうち62首のみを採録している。ところがこの中にある徳川頼宣(1602-1671)の歌が異なっている。崇伝本には「年々に、ねさしをそへて竹の葉の、色かへぬかけや千代の行すえ」とあるが、絵巻には「よろつよも、ともに見ゆきのかさしそと、けふよりちきるたけの色かな」と別の歌が印刷されている。

この歌については、当日の歌会に列席していた智仁親王<sup>82</sup>(1579-1629)の書留が<sup>83</sup>宮内庁書陵部に所蔵されており、ここに徳川頼宣の歌の懐紙の寸法が記され、その後に「年々に…」の歌が書かれていた。すなわち、崇伝本に印刷されている歌がその時の詠歌である。絵巻の作者はこれをわざわざ変更して、別の歌を徳川頼宣の歌としたのである。

実はこの歌は頼宣自身が作った歌ではない。行幸の4日前、9月2日の『本光国師日記』を見ると、水戸頼房(1603-1661)より崇伝宛に自身の歌とともに、徳川頼宣、および徳川義直の3人の歌について公家人への代作を依頼<sup>84</sup>しているからである。それに答えて崇伝は代作の候補者として前述の智仁親王、良恕親王(1574-1643)、三条西実条(1575-1640)、中院通村(1587-1653)、烏丸光広の5人を挙げている<sup>85</sup>。いずれも当代の和歌の権威者である。崇伝の日

記にはこの歌の件に関する記述はこれ以後見られず、また書陵部にある智仁親王の記録からも、この代作を引き受けた人物は5人のうちの誰であるかは明確にならない。しかし、やはり同親王の「行幸之時大御所並將軍御詠作代候事寅九月二日早朝板倉周防守被仰三日詠進候書」<sup>86</sup>と題する書留から、この時の秀忠と家光の歌を智仁親王が代作していることが知られる。この点から推測すれば、頼宣、頼房、義直3人の歌もまた智仁親王が代作していた確率は高い。

では、何故絵巻の作者は徳川頼宣の歌、いや智仁親王の代作した可能性のある歌をあえて変更したのであろうか。またこの変更は誰が行なったのか。当の頼宣や京都所司代板倉重宗などの幕府側からは、代作を依頼するほどであるから、歌の内容や良し悪しについてクレームがでるとは思われない。おそらく歌を作った側において、この「年々に…」の歌が徳川頼宣の歌として相応しくないと、何か作品上の別の理由があったと思われる。

しかし、さきの二条家流<sup>87</sup>の徳川頼宣の歌として相応しい同レベルの新たな歌を作製できる人材は限られている。そこで、当時の歌人のなかから探すとすれば烏丸光広は最適である。勿論「年々に…」の歌も「よろつよも…」の歌も『黄葉和歌集』<sup>88</sup>など光広の歌集中には見いだせないが、当初の「年々に…」の歌を光広が代作していた可能性もあるから、彼自身の歌を絵巻においてさらに作り替えたと考えられなくもない。また、光広は当日の歌会においては、懐紙に書かれた和歌を読み上げる最も重要な講師を勤めているのであるから、当日の詠歌に関しては何もかも熟知している人物でもある。

## (2) 『聚楽第行幸記』

この『寛永行幸記』絵巻の序文は<sup>89</sup>、天正6年に書かれた『聚楽第行幸記』<sup>90</sup>をそのままに倣って書かれている。崇伝もこの『聚楽第行幸記』を参考しているが、序文は独自のものであり全く異なっている。しかし、絵巻の方は年号や固有名詞を除き、「それひさかた乃天ひらけあらかね能地者しまりて…」より、「天气を得給ふにきやうこうなるへきとて」の最後の部分に至るまで全て一致しており、恰も同書を横におき作製したかのようである。言い換えれば絵巻の作者は、新しい印刷技術を用いたという点で方法は異なるが、いわば寛永版の『聚楽第行幸記』を作製したともいえる。

この天正6年の聚楽第行幸の時も歌会が開催されていた。烏丸光広は当時10歳で、父光宣に従い、この歌会に参加し詠歌を遺している。歌会の統括者が光広や智仁親王などの師に当たる細川幽斎(1534-1610)であったことなどから、

光広はこの歌会の歌を『聚楽行幸和歌巻』と題して生涯に何度も書き残している。また、その遺墨は光広が50歳頃の筆が多く、これはまさに絵巻の刊行される時期と重なる。『聚楽第行幸記』は刊行はされなかったため、その内容を知る者はごく限られた人々である。本絵巻の著者はまずこの『聚楽第行幸記』をよく知っていることが第一条件である。この点から考えても光広は著者の条件を満たしている。

### (3) 烏丸光賢

光広の影は、これまで調査してきた古活字版『寛永行幸記』の紙面の背後にも見つけることができる。同様に歌会の詞書について、前述してきたように古活字版では全てが一致している訳ではなく、第一種本と他版種とでは違う歌が入っている。その歌は「石清水すめるを時と千代をへん、うてな竹もかけなびくなり」という歌である。この歌の作者は「参議宰相藤原光賢」である。「参議宰相藤原光賢」とは烏丸光賢(1600-1638)で、光広の長男である。この時26歳であり父光広とともにこの行幸に参加した。

この歌は第一種本には採録されていなかった歌である。この歌を入れたために第一種本以外の版では、第一種本では採録されていたはずの「すえかけて…」という歌が欠けている。その結果、第一種本と以降の版とでは、その後の歌の順番が異なる。そして、第一種本以外の版では「すえかけて…」の歌の作者名のみは、最後の62番目の歌の後に肝腎の歌が無いままでそっと付されているのである。すなわち第一種本以外の版においては、最後の62番目の歌には本来の作者と、「すえかけて…」の歌の作者との2名の作者が印刷されている。この変更は、烏丸光広が第一種本刊行の後、第二種イ本の組版時にさきの「石清水…」という息子の歌を強引に挿入したためと想像できないこともない。

さらに光賢に注目すれば、古活字版第一種本上巻第13紙では光賢が「からす丸左中へん」と植字されているが、以降の版種では全て「からす丸さい志やう」と訂正されている。前述のように、第一種本以外からは「参議宰相藤原光賢」の歌が挿入されるので、やはり「左中弁」ではなく「宰相」と、重ねて光広がこの部分の訂正も指示したと見ることもできる。

以上、草稿本の真偽が不明である限り、草稿本から『寛永行幸記』絵巻の著者を烏丸光広とすることはできない。けれども、頼宣の歌の経緯や序文などに注目するならば、光広は著者となる資格は充分にある。また、前述したように光広と本絵巻との関わりを示唆する事柄などもある。これらの点から、本絵巻

の著者として烏丸光広は有力人物の一人といえる。なお、この絵巻の著者は一人とは限らない。何人かの共著と見ることもできるので、光広はその中の一人であったとも考えられる。しかし、絵巻の中巻冒頭では、8日夜の歌会を全版種が「七日夜」としており、光広をはじめ歌会の参加者が書くならばあり得ないはずの誤記などもあることから、この絵巻の成立については謎が多く残っている。

## おわりに

『寛永行幸記』絵巻が刊行されてから350年以上の年月を経ている。その間の紛失や補修のため、現存する諸本は装訂が変更されているものが大部分であった。この絵巻は文章が少なく、似たような図柄が展開していく行列絵巻であるにもかかわらず、頼りとするはずの丁付が整っていない資料でもある。それ故、今回調査した刊本25本のほとんどに錯簡が存在しており、完全に原装を保っている本は極めてわずかであった。この調査が筆者にとって満足な書誌調査だったとはいえない。けれども、一応ここに刊本『寛永行幸記』絵巻の刊行経緯、および著者について考察してきた。まとめると次のとおりである。

古活字版の最初の刊行は、崇伝本『寛永行幸記』を参考にしており、崇伝本『寛永行幸記』の刊行後である。その時期は絵活字の作製に一定の時間は要したであろうから、寛永4（1627）年頃と推定できる。刊行地は行幸の舞台であった京都である。

刊行順序は、①古活字版第一種本→②古活字版第二種イ本→③古活字版第二種ロ本→④古活字版別種本→⑤整版→⑥冊子本、の順である。最初に刊行されたのは第一種本である。第一種本では摺刷時における部分的な版の組み替えがあった。しかし、刊行は1回のみである。次に絵活字を追加・製造して第二種本を刊行した。第二種本では全面的な組み替えをして、第二種イ本と第二種ロ本の少なくとも2度刊行された。第一種本から第二種ロ本までは、文字活字や絵活字が共通していることから版元は同じであろうと考えられる。版元名は不明である。次に、第二種本の絵活字を全て覆刻して別種本を刊行した。刊行した場所は京都の「あい能まち通高田町」の版元である。③と④の間で版元が変わったか否かは不明である。別種本では版の組み替えの間はなく、すぐに整版が刊行された。整版も版元は不明だが、装訂時には注文に応じて彩色も施した。絵巻形態での刊行はこれが最終で、元禄6（1693）年以降は冊子本形態となった。

著者は烏丸光広といわれてきたがその確証はどこにもない。しかし、著者として仮託するには最適な人物であり、何らかの形で古活字版『寛永行幸記』絵巻の刊行に関わっていたと考えられる。

これが本稿の結論である。刊本『寛永行幸記』絵巻については、今後も新たな伝本が発見されると思われる<sup>9)</sup>。特に今回の調査は国内の主な所蔵機関を中心としたものであり、国外に流出している諸本の調査が充分ではなかった。この部分の調査も含め本稿では確認するに至らなかった諸本の調査を今後の課題としたい。

## 注

1. この『曾我物語』の組版挿絵に関しては、すでに岡雅彦氏の国文学研究資料館本を解析した詳細な研究がある。「古活字版『曾我物語』の絵組について」(『かがみ』32・33合併号 平成10年3月 大東急記念文庫)
2. 天理図書館蔵小汀利得旧蔵古活字版『七人比丘尼』(上巻1冊のみ現存。『増補古活字版之研究』図録1025番、および『弘文荘待賈古書目』45号(昭和49年)258番に一部の図版が掲載されている。)、『四生歌合』、『仙伝抄』なども文字とともに部分的に挿絵が植版されていることで知られる。『四生歌合』や『仙伝抄』には絵活字の繰り返し使用は見られないが、『七人比丘尼』では上巻部分に3回繰り返し使用されている絵活字が1個ある。
3. 『書物の趣味』第4冊(昭和4年 書物の趣味社)63~82頁。
4. 現在京都大学には、文学部古文書室に1本、附属図書館に2本の合計3本の古活字版がある。
5. 京都大学附属図書館には甲に相当する古活字版が2本ある。第二種口本である京大図書館A本と第二種イ本である京大図書館B本である。
6. 当時細川開益堂書店には整版の『寛永行幸記』もあり、整版の方は高木利太が購入、その後には横山重所蔵本となり、現在は早稲田大学図書館本となっている。
7. 正宗文庫は国文学者正宗敦夫(1881-1968)の収集書。
8. 『増補古活字版之研究』では、安田文庫には刊本『寛永行幸記』絵巻は古活字版2本と整版2本の合計4本があったと記されている。安田文庫の蔵書については、大東急記念文庫編「旧安田文庫蔵書の復元」(『かがみ』32・33合併号)に詳述されている。
9. 『栗田文庫善本書目』(昭和15年 中文館書店)23頁。栗田文庫は書誌学者栗田元次の収集書。
10. 天理図書館では後述する古活字版第二種口本(天理A本)と整版(天理B本)との2本を所蔵する。
11. 京大図書館A本には彩色が施されている。推測するに『増補古活字版之研究』において川瀬氏は古活字版は無彩色、筆彩色は覆刻整版と分類していることから、山鹿論文に彩色があると書かれている京大図書館A本についてはおそらく実見されぬまま、覆刻整版と分類されたものと思われる。



12. この表に挙げた以外に、まだ刊本『寛永行幸記』はかなり伝本していると思われる。ニューヨーク・パブリック・ライブラリーでも1本所蔵する。『スペンサーコレクション 蔵日本絵入本及絵本目録』（昭和43年 弘文荘）76頁参照。
13. 東京帝国大学所蔵本については、和田万吉（1865-1934）著『古活字本研究資料』（昭和19年）98頁に記載される。各巻の紙数から第一種本と判定される。上・中・下巻の順で1軸に装訂されていた由。全紙数64枚とあるので2枚欠落していたとみられる。
14. 前述の『書物の趣味』第4冊63～82頁に上巻第18紙、中巻第5紙の写真が掲載される。上・中・下巻の3巻とある。上巻が全30枚とあることから1枚欠落していたとみられる。
15. 国会A本の請求記号は〈WA 7-154〉。
16. 『国立国会図書館蔵古活字版図録』（平成元年）に「第一種本と第二種本の合装本か」とあるが、「第一種本」である。
17. 国会B本の請求記号は〈WA 7-230〉。
18. 岡雅彦氏よりコピーをご提供いただき調査した。なお、この本は『弘文荘待買古書目』（平成10年 八木書店 CD-ROM）no. 18、42、45に第一種本として掲載されたものと同一本と思われる。
19. 岡田真（1901-1984）は昭和期の実業家で蔵書家。
20. 岡雅彦氏より国文学研究資料館所蔵のコピーをご提供いただき調査した。
21. 神田香巖は神田喜一郎（1897-1984）の祖父にあたる人物。蔵書の一部は『容安軒旧書四種』（大正8年刊）として紹介されている。
22. 第一種本以外ではこの後に「さきへ」とあるが、第一種本ではこの部分は欠落している。
23. 「次第」の誤植である。
24. 第一種本下巻末第26紙跋文部分の国会A本、某氏所蔵本、陽明文庫本、チェスタービーティー本の4本と、正宗文庫本との相違は以下のとおりである。（下線部分が異なる）

	正宗文庫本	国会A本、某氏所蔵本、陽明文庫本、チェスタービーティー本
下巻第26紙跋文	「…公家てん志やう人其外やく々、乃志多い乃遣川かうさ 志やうひ（「ち」 <u>欠</u> ） <u>里</u> きく王ん遣んにてやうかうならせ給へハ…」 「…左様乃かた々爾あらましとハなかなれともみせ申さん」	「…公家てん志やう人其外やく々、乃次第乃遣川かうさ 志やうひ <u>ち</u> 里きく王ん遣んにてやうかうならせ給へハ…」 「…左様乃かた々爾あらましとハなかな申す尔及者され共みせ申さん」

25. 江戸博本の請求記号は〈95201706-08〉。
26. 江戸博本は、『弘文荘待買堂書目』27号（昭和31年7月）52番に、上巻第1紙序文と第2紙「二条城図」の半分、下巻第1紙全部および第2紙のはじめの部分の写真がある。また『古典籍下見展観大入展会目録』（平成7年）72頁には、前記の部分と中巻第1、2紙の部分の写真が掲載されている。
27. 京大図書館B本の請求記号は〈貴5-17/別カ/2〉。
28. 安田文庫B本は『古活字版之研究』によると、下巻が欠けていたということである。
29. 国文学研究資料館には古活字版と整版の2本がある。本稿では古活字版を国文研A本、整版を国文研B本と称す。
30. 岡雅彦氏より御教示いただいた。上巻が29枚、下巻が21枚、中巻が欠けるとのことである。

31. 国会C本の請求記号は<WA 7-229>。
32. 天理A本の請求記号は<328.8-イ1>。
33. 京大古文書室本の請求記号は<国史さ9>。
34. 京大図書館A本の請求記号は<貴5-17/別カ/1>。
35. 書陵部本の請求記号は<516-186>。
36. 第二種口本において部分的に印刷されている「上」の巻表示は、紙継部分のため見えない本が多いが、下巻第21紙は書陵部本のみ右下に「上」と印刷巻表示がある。この部分の巻表示は誤植と思われるが、「上」とあることから書陵部本では上巻に入れたのであろう。
37. 請求記号は<516-191>。表紙に『二条亭行幸圖』と墨書がある。1軸。薄茶色絹表紙。大きさ縦29cm。
38. 当館所蔵古活字版の中では、『ちんてき問答』をはじめとして似通った種類の活字が見られるが、特定するまでには至らない。
39. 第二種口本下巻第10紙左下には、左手に扇を持ち後向の布衣の絵活字が使用されているが、国文研A本の紙面には、この絵活字の横幅3.5cmの活字跡が影出されている。
40. 推測するに、この点から『増補古活字版之研究』では安田文庫A本を別種本とせずに、第二種口本の異植字版として第二種イ本と分類したと思われる。
41. 例えば上巻第28紙、下巻第11紙などでは白丁の絵活字の配置が、また下巻第1、12紙などでは布衣の絵活字の配置が異なっている。
42. 牛車の全11図のうち10図は、牛車の絵活字と牛の絵活字との2個の絵活字が繋合わされて一図としてできあがっている。この絵活字が繋合わされていることに関しては既に岡雅彦氏が指摘されている。([古活字版『曾我物語』の絵組について]([かがみ]32・33合併号 平成10年3月 大東急記念文庫)
43. 整版は第二種口本と非常によく似ていることから、高木文庫旧蔵本をはじめとして、これまで第二種口本と見間違えられていることが多かった。
44. 平成12年1月開催『大阪古典会特選市出品目録』3頁、平成13年11月『東京古典会入札目録』211頁に写真が掲載される宝玲文庫旧蔵本3巻も整版である。よって、宝玲文庫には、第二種口本と整版との2本があったことになる。
45. 五季文庫は渡辺守邦氏所蔵本
46. 川瀬一馬著『龍門文庫善本書目』(昭和56年)137頁376番。未披見。
47. 『岩瀬文庫図書目録』(平成4年 西尾市教育委員会)215頁に『御行幸次第』3巻 二条亭へ御行幸絵巻彩色』とあることから整版と判定した。目下当文庫が閉鎖中のため調査できない。なお、小野忠重著「活字・活画・色刷考」([文学]49巻11号 昭和56年11月 岩波書店)に、岩瀬文庫本として下巻第2紙および第23紙の一部の図版が掲出されているが、この図版は料紙の汚れ部分などから判断して古活字版第一種本である国会A本ではないかと思われる。いずれ詳細な調査を行いたい。
48. この本は目下整理中である。
49. 東北大本の請求記号は<別置阿15-161>。
50. ここには「活字版」とある。
51. 早稲田本の請求記号は<ワ3・7043>。
52. 横山重著『書物搜索下』(昭和54年 角川書店)502頁にこの本の購入経緯が書かれている。ここで横山氏は「題簽が3軸とも完備していた」と記しているが、早稲田本は大福

な錯簡などもあることからその後に題簽が剥落して、下巻の題簽のみが残ったものと思われる。

53. この中では古活字版として紹介されている。
54. 『高木文庫古活字版目録』(昭和8年)40頁。ここには上巻28枚、中巻18枚、下巻23枚とあるが、これでは総紙数が69枚となり、整版の総紙数は68枚であるから不審である。おそらく数え違いであろうと思われる。また刷題簽書名が「御行幸次第」とあるがこれも「御行幸次第」の間違いであろう。
55. 国文研B本の請求記号は<ヨ2-32-1~3>。
56. チェスタービーティー本にも同様の印記があることから、両者は同一人物の旧蔵になるものと思われる。
57. 天理B本の請求記号は<328.8-イ5>。
58. 蓬左文庫本の請求記号は<105・1>。
59. 『名古屋市蓬左文庫国書分類目録』182頁に記載。ただし「古活字」とあり。
60. 内閣文庫本の請求記号は<内262・54>。
61. 成實堂文庫の請求記号は<1230103>。
62. 『新修成實堂文庫善本書目』548頁。ただし「中巻欠」と記載されている。
63. 大東急本の請求記号は<11-27-2095>。
64. 『大東急記念文庫書目』352頁には「巻中のみ」とある。
65. 歴博本の請求記号は<H-63-15>。
66. この部分は古活字版は全て「大屋民部少将」となっているが、「土屋民部少将」が正しい。
67. 『書物の趣味』第6冊(昭和5年 書物の趣味社)66~71頁。
68. 宮内庁書陵部所蔵『行幸之次第』と墨書書名のある3巻3軸(請求記号<B6-399>)は、整版の模写で元禄3年に書かれたものである。大きさ縦19.4cm。絵の輪郭を墨筆で模写し、部分的に桃、緑、薄茶、白などで彩色を施す。中巻詞書の末尾に「右ハ初日はかり也。後日ハ七五三也。いろいろの品々之御献立共有/元禄三年菊月十日写之/烏丸廣明(花押)」とある。また、『葵徳川三代』(平成12年 NHKプロモーション)に掲載される彰考館徳川博物館所蔵本3巻3軸は、第二種口本をもとに描かれていると推測される。寛文5(1665)年の奥書と「寛永三年九月六日御上洛御行幸図」の内題がある。
69. 蓬左文庫の請求記号は<11-82>。
70. 冊子本の版本絵入『寛永行幸記』は、元禄6(1693)年に初版が刊行され、正徳2(1712)年に再刊されている。冊子本は卷子本整版を原本に作られたと見られるが、詞書や絵の部分には改変がある。
71. この本は目下整理中である。
72. 野々口親重は俳人、画家。仮名草子『十帖源氏』『おさな源氏』の作者とされる。行幸当時32歳で京に居住しており、この華麗な光景は目にしていたことであろう。烏丸光広とも関係の深い人物である。
73. 刊本『寛永行幸記』絵巻の序文は後述する『聚楽第行幸記』を手本に書かれており、それに倣うならばここはやはり「天氣を得給ふに」でなければならない。この写本において、何故この部分が変更されているのかは不明である。
74. 『聚楽行幸記』、『聚楽亭行幸記』などとも称す。
75. 『本光国師日記』(昭和45 続群書類従刊行会)霜月廿四日の条に「天龍寺鹿王院倫蔵主

- 来臨。夢窓眞筆之天龍行幸之記録巻。並普明國師僧録御繪旨一卷。直ニ返シ渡ス也」とある。
76. 同日記十一月七日の条に「加々爪民部殿十月晦日之状来。行幸之書物大望之由申来」とあり、將軍家光がこの書の完成を待っている様子が窺われる。
  77. 例えば、寛永頃刊『孝経大義』1巻1冊に使用されている活字と同じである。
  78. 崇伝本は装訂が立派なわりには、活字部分に非常に誤字脱字が多い。上巻に限れば、まず序文中に2箇所あることをはじめとして、料紙裏から施された貼紙の訂正は20箇所に及ぶ。この訂正は、国会本ばかりでなく内閣文庫本も同じであるから、全て印刷後に貼紙訂正が施されたと思われる。よほど刊行を急いだようである。
  79. 請求記号は<108-50>。この写本は、崇伝より徳川義直に献本されたものと推測される。崇伝の自筆か否かは不明である。2巻2冊。大きさ28.0×29.0cm。紺色の表紙および「寛永行幸記 乾(坤)」墨書されている題簽は後代のものである。しかし、下巻見返し部分に当時の薄茶色地に金泥で花模様を描かれた題簽が1枚貼付されており、そこには「寛永行幸記下」と墨書がある(上巻の元題簽は無い。補修時に失われたものであろう)。この清書本と刊本とを比較すると、内容記述は全く同じである。しかし、清書本は四周単辺半葉8行17字で書かれているが、刊本は四周双辺半葉9行17字で印刷してある。したがって、両者は1行ずつのずれがある。この違いは組み版の都合上で生じたのであろう。
  80. 大東急記念文庫本(請求記号<11-27-2097>)には「出納」の印記があることから、中原(平田家)家旧蔵本である。おそらく中原職忠当時のものであろうと思われる。内閣文庫本(請求記号<特121-11>)は、表紙に「新宮城書蔵」の印記があり、水野忠央(1814-1865)旧蔵本である。なお、横山重氏旧蔵本も『書物搜索下』(昭和54年 角川書店)で、「新宮城書蔵」の蔵書印があり水野忠邦(1794-1851)旧蔵本であるとされているが、「新宮城書蔵」の印が確かであれば水野忠央であるべきでこの点不審である。崇伝著『寛永行幸記』は静嘉堂文庫、東洋文庫、島原松平文庫(2部)、京都府立総合資料館、国文学研究資料館(田安家旧蔵)等でも所蔵する。
  81. 国会本は2巻2冊。大きさ29.2×20.2cm。菊花雷紋繫空押丹表紙原装。印刷題簽「寛永行幸記上(下)」。四周双辺。半葉9行17字。上下花魚尾。黒口。版心「行幸序(丁数)」「行幸上(下)(丁数)」「時習館/図書/之印記」「斎藤/文庫」の印記がある。請求記号<WA7-184>。
  82. 智仁親王は、正親町天皇の第一皇子誠仁親王の第六皇子。当初豊臣秀吉の猶子となり、その後、八条宮と称した。二条家流の和歌を細川幽齋より継承した。
  83. 『二条亭行幸和歌御会懐紙之留』。請求記号は<桂808>。
  84. 同日記九月二日条「水戸中納言様ヨリ御書来ル。…(中略)…仍。今度歌之御會付両大納言殿も、公家衆へ御頼入之由候。撰家衆。御門跡衆。公家衆之内。よく被為讀候衆。御内証被仰聞可被下候。…」
  85. 同上「右返書進上申候。御歌之代作ハ。八条殿。竹内御門跡。両伝奏。烏丸大納言。此内御意次第被仰遺尤之由申進候也。」
  86. 『二条亭和歌御会秀忠家光等詠』。請求記号は<桂1272>。ここには「大御所御作代」として2首、「將軍御作代」として2首、さらに「松平下野守」「京極丹後守」などの大名の代作歌など合計8首の歌が走り書きされている。

87. 智仁親王は二条家流の歌の継承者である。烏丸光広はこの親王とともに細川幽齋より二条家流の歌道を授かっている。
88. 国立国会図書館本の請求記号は<124-206>。
89. 序文（第一種本の翻刻）「それひさかた乃天ひらけあらかね能地者しまりて／より古のか多神代の年月をよそへ寿といへとも／そのれきてんたし可なら須人王らん志やうちんむ／天王よ里く王んゑいの今耳いたるまでせい志ゆ／百十代せいさう二千二百七十五てうてい乃まつり／ことまさきのか徒ら多へ寿里やう志んの徒とめ盤／松乃葉のち里うせ寿今にをよふといへとも其道を／徒多ふる人をたくなし志可る爾いま古々耳／さ記のせい為將軍左大臣源秀忠公／同右大臣源家光公 里やうひ川たるゆへ爾国家あん／せん四可いおた屋可耳まつ里古と多々し幾耳／よ里婦るき越多つ年あたら志きをもとめすたれる／をひろひ天氣を得給ふにきやうこうなるへきとて／二条ていに満ふけの御所をいとなミかんわの飛を／津くし志ゆきよくをのへあふきてもそのよそほひ／れき々としてかきりなしか々類めてたきミゆき／能ことの者なり。」
90. 「夫ひさかたの天ひらけあらかねの地はしまりてより以来神世の歳月をよそ籍といへとも其暦数たしかならず（後略）」。（『群書類従』巻第40所収）
91. 平成13年11月東京古典会の入札目録に「宝玲文庫」と「アカキ」の印記がある3巻本が掲載されており、第二種口本である。横山重氏は、前述の『書物搜索下』（注52参照）で、この絵巻を2本持っていたと書いているので、1本は整版の早稲田本で、もう1本がこの本であろうと思われる。

（ましまゆみこ 図書館古典籍課）